
可塑世界の監視者

みくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可塑世界の監視者

【Nコード】

N2854M

【作者名】

みくも

【あらすじ】

僕の眼は特別。過去も未来も全て見る。ある日これから起る殺人を見るが、ただひとつ犯人の姿だけが視えなかった。僕は初めて出会う「視えない未来」の殺人を探るが……。

可塑世界の監視者（一）

（一）

どうやら、僕には理解できないのだ。

時間の概念と言うものが。

流れてしまえば二度とは戻らないと人は言うが、それさえも実感を以って理解する事は難しい。

だって、何が違うか解らない。

僕の眼にはいつだって、全ての時間が視えているから。

老いた父母、結婚したばかりの父母。結婚するより前だろう若い頃の父や、まだ子供だった頃の父。

とうに亡くなった祖父母や、またはその若い頃の姿。会った事さえない曾祖父母に、着物で髷を結った見知らぬ人達。

僕の通った小学校の制服で、家の中を走り回る子供達。これはもしかすると、僕の子供なのかも知れない。

それらの「時間」達が幾重にも重なって、そのくせそれぞれ干渉し合う事なく存在する。

家の中でさえ、人々が部屋を一杯に埋め尽くして。

一步でも外に出れば、その数は途方もない。

僕はいつだって、それら全ての時間に囲まれて来たのだ。

幼い時には疑いさえしなかった。自分に取って世界とは、最初からこうだったのだ。

僕の眼が特別だと気がついたのは、ずいぶん経ってからだった。

——特別。

この表現でいいのだろうか。

確かに、僕の眼は他の人に見えないものを視る事ができる。

けれども、だから何だ？

彼等は彼等の時間を生きているが、彼等は僕に気づかない。僕が

関わる事ができるのは、僕が生きる「今」だけだから。

でもこの眼には、全てが同じ。今も、過去も、まだ訪れない未来さえ。

そして当然の事ながら、「今」に存在して僕が触れられる人達よりも、昔いた人達やこれから生まれる人達のほうがずっと多い。

想像できるだろうか？

触れる事も関わる事もできず、ただ僕は視ているに過ぎない。視ている事しかできない。

それらの中で、僕はいつも一人。
一人なんだ。

＊

僕の孤独感を深めた最たる理由は、その不干涉さだ。

そこにいるほとんどの人達は僕の存在を認識せず、彼等の意識は空気よりも不確かに僕の手をすり抜けて行く。

理解しているつもりだ。彼等と僕では、存在する場所が違うのだと。ただそれだけの事だと、解っているつもりだった。

しかし少なくともこちらの感覚としてだけなら、彼等はいつだつてすぐ目の前にいる。

常に周囲を埋め尽くす限りなく実体に近い影達は、誰一人として僕がここにいる事に気づかない。僕には時間の影と現在の人間達がどう違うのか、それさえよく解らないのに。

そして圧倒的な数の差で、彼等は僕の存在を拒絶する。

その状況は、長く僕を苦しめた。

だが人は、「時間」と共に学ぶ。

僕は成長するにつれて、「眼」の閉じ方を覚える事ができた。今では「現在」とその前後、わずかな誤差の範囲だけで世界を視る事ができる。もちろんうっかり気を抜いて、全てを「開いて」しまう事もあるが。

その時には酷い乗り物酔いみたいに、眩暈や吐き気で立ってられないほどになる。だから言う時は大抵が本当に酔っているか、体調が優れない時だ。だから周囲の人間は、僕の具合が悪くても納得してしまう様だった。

眼の閉じ方を覚える以前、幼い頃はいつもこんなふうだった。何でもないので突然吐いたり、恐らく膨大な情報を処理するためだろう。脳が熱を持ってすぐ倒れた。その事で幼い僕は病弱な子供だと言われていた。

今では多少の誤差はあったが、視ようとしらないものは視ない事ができる。そのはずだった。

でも、出会ってしまった。

普通なら、出会わなかった。

それを見つけた時、だから僕はまるで霧の中でも歩いているふうだった。

堪らずに足を止め、ちょうど手の触れたコンクリートの壁に体重を任せる。胃がむかついて、眩暈がした。昼間なのに視界が暗い。

深い呼吸を二度三度繰り返し、再び顔を上げて歩き始めた。真っ直ぐ進んでいるかも知解らなかったが、とにかく少しでも早く家に辿り着きたいと思った。

そんなふうに考えて、足を踏み入れたのは普段なら通らない場所。周囲の道路にガードレールがある他は、フェンスもない。だから簡単に入り込めるが、確かここは名前も聞いた事のない様な会社の私有地だった。

敷地はけっこう広くて、そこに建つ極端に窓の少ない建物はいくつもの棟に分れていた。その余白みたいに残された屋外の通路は、何度も複雑に折れ曲がって分岐も多い。ほぼ見つかる心配はないだろう。

でもやはり万が一にも見つければ悪いのは完全にこちらだし、怒られるのは好きじゃない。駅から自宅への最短ルートではあったが、普段は寄りつかない事になっている。

だけどこの日は体調が最悪で、少しくらいいいだろうと言う気になった。

この事が幸運だったか、不運だったか。

僕にはよく解らない。

それは、すでに横たわっていた。

それは、血を流していた。

それは、もう呼吸を止めてしまっていた。

開かれたままの彼の眼は、少し乾き始めていた。

僕は、さかまつ かずひろ榊末広和の死体を視つけた。

——いや、この表現は正確じゃない。

この時点では僕に取って、目の前の死体は「名前も知らない誰か」に過ぎなかったからだ。

では、僕はいつ榊末さんを知る事になるのだろう。
すぐに解る。

倒れ込む榊末さん。

その直前、慌てた様子で走っている榊末さん。

夏服を着た榊末さんや、コートを着て寒そうにしながら建物に入って行く姿もある。

その他にも、人の姿。榊末さんと同じ様に建物に出入りしている人達は、ここで働いているのだろう。建物の外には今の僕みたいに、近道しようとして入り込んだ人達が数え切れないくらいにいる。

現実と何一つ変わらないそれらの影に囲まれて、僕はようやく自分の状態に気がついた。

ああ、まずい。

思った時にはもう遅い。ずっと感じていた鈍い頭の痛みの中に、針で刺す様な鋭いものが混じっている。

火を宿す真っ赤な炭が燃え尽きて灰になるかの様な、チリチリと焦げつく音が頭の中で聞こえる気がした。

僕の「眼」は今、ほぼ全開に近いはずだ。つまり余りに多くの、途方もない「時間」を受け入れていると言う事だ。

この状態は何人分もの「時間」を幾重にも視る事ができるが、長くはもたない。僕が、もたない。

紙の束を抱え、深刻そうな顔で歩くのはいつもの事らしい。その榊末さんが何人も、縦横に移動しながら僕の傍をすり抜けて行く。そのひとつが、顔を上げた。眼を通していた書類を隠す様に揃えながら、不審げに眉をひそめる。

それから足をこちらに向けたと思うと、あっという間に傍に来て僕を咎めた。

「ここは私有地だ。勝手に入り込んで、何をしている？」

これが、僕が榊末さんを知った瞬間。

榊末さんが、僕を知った瞬間。

身長差のために、僕はずっと高い場所を見上げなくてはならなかった。

榊末さんの真っ黒な髪に縁取られた顔は、真っ直ぐ僕を見返していた。

少し恐かった。けれども眼を離せなかった。

僕はほとんど呆然として、その顔を見上げていた。

「ここは道じゃない。通り抜けでも、立派に不法侵入だぞ」

返事をしない僕に、榊末さんは苛々と言う。

この事が僕を動揺させていた。

僕が関わる事ができるのは同じ「今」の存在だけで、僕に関わる事ができるのも同じ「今」の存在だけだ。

だから少なくとも今、榊末さんは生きている。生きて、僕と同じ場所に立っている。

すでに死んだ人間なら、いくらでも視て来た。まだ生まれていない人間も視た。

だがこれから殺されると決まった人間を視るのは、初めてだった。

「聞いているのか？」

榊末さんの手が、僕の肩に伸びる。

動揺と、混乱と。

開きっ放しの「眼」の負担がピークだった。
トン、と。肩に。

ほんのわずか、なでる程度の重さを感じた。
そして僕の意識は唐突に途切れた。

可塑世界の監視者（二）

（二）

僕を捉えたのは、一体何だったのか。

後になって何度もそれを考えたが、自分にもはっきりとは解らなかった。

人が死ぬのを放っておけなかったのか、それとも榊末さんだから助けたかったのか。これは、動機が前後するけど。

でも一つだけ、確かな事がある。

僕は酷く強い興味を覚えた。

その、不可解さに。

血を流し倒れる、榊末さんの死体に。

もう一度、確かめなくちゃ。あの場所へ行って、ちゃんと視なくちゃ。

僕は熱に浮かされる様に、まだはつきりと目覚めない内からふらふらと起き上がろうとした。

「おいおい。待て、急に起きるとまた倒れるぞ」

ぶっきらぼうな、それでも気遣うふうな声。同時に感じた、コーヒーの香り。

僕は内心で首を傾げた。

うちでは、誰もコーヒーを飲まないのに。

「あ……」

「寝ぼけたか？」

慣れないコーヒーの香りがしても、不思議な事は何もなかった。だって僕の目が覚めたのは、自宅ではなかったからだ。

からかう様に眼を細め、榊末さんが僕を見ていた。さっきと同じ黒っぽいシャツに、今は白衣を重ねている。その片手に、コーヒーを注いだカップがあった。

「あの、僕は……」

「倒れたんだ」

端的に、問うより先に答えが示された。

そうか、倒れたのか。体調の悪さに動揺と「眼」の負担が重なって、体が勝手にスイッチを切ったのだろうか。僕が壊れてしまう前に。

「すみませんでした。僕、あの……」

「いいのよ、ごめんなさいね。アノヒトが驚かせたんじゃない？」

慌てて顔を上げると、すぐ傍に女の人がいた。榊末さんと同じ様に白衣を着て、赤い唇でにっこりと笑う。

彼女は一つにくくった髪と大きなイヤリングをしゃらりと揺らし、歌生うたぎと名乗った。

あの人、とは榊末さんを言ったらしい。僕が理解するより先に、本人が顔をしかめて歌生さんを睨んだ。

「ほら、こわい」

少しも気にした様子なく、こちらに向けた顔は笑う。その笑顔にほっとして、僕も少し笑い返した。

視界の隅で、榊末さんの横顔が呆れた様にため息をつく。その視線に気がついたのか、歌生さんも僕と同じほうを見ながら口を開いた。

「アノヒトはね、榊末って言うの。顔がこわくて性格も悪いけど、仕事は凄くできるのよ。ね、アナタの名前を訊いてもいい？」

「あ、すみません。僕は、硯深けんみと言います。硯深脩おさむです」

僕は寝かされていたソファの上に座り直し、頭を下げる。

「ご迷惑をおかけしました」

「はい、どういたしまして」

歌生さんは面白そうに笑い、どうやら僕をまねたらしく膝に手を揃えて頭を下げた。そこへ、不機嫌なのか呆れているのか判断できない声がする。

「何で歌生が返事するんだ。迷惑したのは俺だろう」

「運んだだけでしょ。容態を診たのは科本サンだし、看病したのはアタシだもの」

「か……看病？ すいません、本当に」

ソファの上にちゃんと寝かされていたのは解っていたが、看病までされていたとは思わなかった。慌ててもう一回頭を下げる。下げようとした。

だが榊末さんが椅子に座ったまま床を蹴り、ほとんどぶつかるといいたい大きな手で僕の頭を掴んで止めた。椅子にはキャスターがついていたらしい。

「嘘だ。こいつはただ、お前の寝顔を眺めてただけだぞ」

「やだ。人聞き悪い」

「事実だろう」

「だって、可愛いんだもの」

言い争いが始まってしまった。驚いた事に、歌生さんは一步も退いてない。

どうしたらいいか解らずに、僕は困り果てた。きっと顔にもそれが出ていただろうに、少しも気づいた様子なく榊末さんはさらに続ける。

「いい歳してガキに欲情してんじゃねえぞ。警察沙汰はごめんだからな」

「愛に理解のない男って、これだからダメね。そのうち、騙した女に刺されるわよねえ。これじゃ」

と、歌生さんは優しい笑顔で同意を求めた。僕に向かって。

その表情が、ふと曇る。

僕の顔を見たせいだ。

きっと冗談だったのだろう。初めて見たから驚いたけど、二人にはこんな口喧嘩はいつもの事に違いない。

でも僕は、全身から血の気が引くのを感じていた。耐え切れなくて、ぎゅっと強く目蓋を閉じる。

暗く沈んだ視界の中に、榊末さんの姿が浮かんた。倒れた体。伸

びかけた髪。グレーがかった夏物のシャツ。

その脇腹に、銀色に光る何かが刺さってはいなかっただろうか。

「困りますね」

唐突な声。男の人の声だけど、でも榊末さんじゃなさそうだ。

迷惑そうな、億劫そうな。

恐る恐る眼を開けると、そこにスーツ姿の男の人が現れた。

その人は少しの間だけ僕を見下ろし、それから歌生さんに視線を移した。

「部外者の立ち入りは……」

「どうしてアタシって決め付けるのよ！」

「普段の行いだな」

無関係を装って、部屋を出ようとする榊末さんを歌生さんの手が掴む。

「部外者を連れ込んだのはコノヒトよ。でも、責めるなら榊末くんだけにしてね。脩くんは、コノヒトが恐くて倒れちゃっただけなんだから」

「……珍しいですね。榊末さんが研究以外に労力を割くなんて」

「お前の中の俺はどんな人でなしだ？ 目の前で倒れたものを、捨てても置けんだろーが」

「榊末さんの人間性には興味がありませんが、規則違反です」

「ラウンジだもの。いいじゃない。研究室に入れた訳じゃないわ」

「しかし……」

「あのっ」

無限ループで口論が続きそうな中に、勇気を出して口を挟む。と、そのとたん一斉に口を閉ざして三人は僕を見下ろした。

「すみません……。僕が、勝手に倒れただけなんです。それを榊末さんが運んでくれたみたいで……。あの……。もう帰りますから」

言葉がうまく出て来なくて、最後には頭を下げる事しかできなかった。短いため息が、僕の下げっぱなしの頭に落ちる。

「もう結構です。ただし、二度とこう言う事はない様に」

そう言って、眉間にシワを寄せたままラウンジと呼ばれた部屋を出る。この人は事務員の成半さんなりなかだと、後で歌生さんが教えてくれた。

「若いのにねえ、成半くん。あんなしかめっつらじゃ早く老けるわよねえ」

「だとしたらお前のせいだと思うけどな」

本人がいなくなった所で、好き勝手な事を言う。どうやら、止めるのは無理そうだ。

成半さんが一番若くて、榊末さんは年が近くて、歌生さんがちょっと年上。そんな事まで話し出した二人の会話は聞き流して、僕はのろのろと立ち上がる。緩められたネクタイを直し、ソファの背から上着を取って腕を通す。

すると、歌生さんが驚いた様な声を上げた。

「あら、エテルナ学園の制服ね。中学生かしら？」

言われて、僕は自分の姿を見下ろした。それから多分、情けない表情で顔を上げる。

「高校生です」

確かに先月、中部部から高等部に上ったばかりなんだけど。

面倒くさそうに手を振る榊末さんとはその場で別れ、歌生さんに何度も謝られながら出口に向かった。

僕が寝かされていた場所はラウンジだと言っていたが、成半さんが渋い顔で注意した理由がやっと解った。そこから出口まで辿り着くのに、歌生さんはドアをくぐるたびに何度もIDカードを使って身分照会を行わなくてはならなかったからだ。

正直な所、ここまで警備が嚴重だとは思わなかった。だって建物を一步出たら、外にはフェンスさえないのだ。警備員が見回っている姿も、見かけた事がない。

歌生さんいわく、大げさな警備は中に大事なものがあると教えるのと同じ。だからあえて、外側には何もないのだそう。

そう言うものだろうか。

とにかく外とは比べものにならないくらい、中の警備は厳重だった。それにさっきの会話の中に、研究室と言う言葉が出て来た。

単純な理由だけど榊末さんも白衣を着ていたし、この場合はここで大事な何かの研究が行われていると考えていいだろう。

それは、理由になるだろうか？

歌生さんに見送られ、建物に囲まれた通路を歩きながら僕は考える。

そして足を止めた。

榊末さんは変わらずそこに、血を流して倒れている。

けれども、それだけだった。

こんな事は初めてだ。

榊末さんは、どんなふうに残ったのだろうか。

腹から突き出た銀色の刃物は、どうやってそこに突き立てられたのだろうか。

全てを視てしまうはずの僕の眼は、どうしてもそれを視てくれなかった。

榊末さんの死の瞬間はそこにあるのに、それをもたらした人間の姿はない。

僕は生まれて初めて、「視えない」未来に出会ったのだ。

可塑世界の監視者 (三)

(三)

僕の通う学校はミッション系の私立校で、長い歴史と構内の中央にある立派な礼拝堂が特徴だった。

正直に言うと、長い歴史のある場所は僕には余り向いてない。道や建物が同じなら、人の存在する位置も限られてしまう。だから他の新しい場所よりも、時間の影達が密集している気がするのだ。

その事については学校選びを間違えたかと思ったが、それでも中学からそのまま高等部に進んだのには理由がある。

一つは、この礼拝堂が気に入っていた事。神さまと教師達の眼をはばかりて、誰もが静謐に過ごすから。

いつも僕は影達で埋まったベンチには座らず、一番後ろの壁にもたれた。

高い天井いっぱいのステンドグラスが、礼拝堂に薄く明かりを広げている。その様子を、ここからぼんやり眺めているのが好きだった。

「もうお帰りなさい、硯深くん。じきに暗くなりますよ」

ひっそりとした声と足音が、耳を打つ。首を向けると、黒い服に身を包んだ人影が入り口にあった。

学校を替えなかった、もう一つの理由。

「弓井先生」

神に仕えるその人を、しかし僕等はそう呼んでいた。実際、弓井先生は神父さまと変わりない服装をしていたが、教室では生徒相手に数学を教えた。もちろん普通の先生もいたが、この学校では文字通りの聖職者も多い。

中でも、僕が一番好きなのが弓井先生だ。信頼と言ってもいい。だからこの時、促す様に微笑んだ先生に僕は訊いてみたくなった。

この数日、胸の中にあった事。

「先生は、運命を信じますか？」

「運命……、ですか。また難しい事を尋ねますね、きみは」

困り顔を覗かせた弓井先生を目の前に、僕は頭の中で榊末さんの事を思った。

「例えば、もうすぐ死んでしまう人がいて……死ぬ事は決まっています。でももしかすると、助けられるかも知れなくて。けどもしそれが運命だったら、僕がその人を助けたいと思うのは……」

「間違っているか、と？」

「……はい」

弓井先生は僕の顔をしばらく見た後、「ふうん」と呟いて手近のベンチに腰掛けた。指を組んで合わせた両手を、黒衣に包まれた膝に載せる。

後を追って傍に寄ると、先生は僕を見上げてにこりと笑った。

「解りません」

「え」

「わたしは、運命に触れた事ありません。きみの事情は知らないけれど、少なくともわたしは運命を感じた事がない」

柔らかな声と裏腹に、すっぱりと言い切る。

戸惑う僕に、先生は変わらず穏やかに続けた。

「ですが運命が存在するなら、それを定めるのは神だと思う。だとしたら」

「御心に従うべきだと……」

「いいえ。気にする事はないと言いたかった」

弓井先生は僕の手を取り、自分の隣に座らせる。それから前を向き、組んだ両手を前のベンチの背に載せた。

「神は偉大です。偉大過ぎて、人間に理解できる御心はごく一部でしょう。我々に出来るのはせいぜい道を外れず、神の御前で恥じる事のない最善を選ぶ事だけではないのかな」

礼拝堂の奥、祭壇を見つめる横顔。少し寂しげに笑んだそれを、

僕はそっと盗み見た。

先生の言葉は、いつもこうだ。いつも、自分の信じる言葉で語る。きつと、聖職者らしくはない。でも、だからこそ信頼できるのだと思えていた。

僕は隣の先生をまねて、組んだ両手をベンチに載せた。それに額をすりつけ、顔を伏せる。

神さまを信じてはいないのに、なぜだか誰かに祈りたかった。

＊

榊末広和は死ぬ。

恐らくそれは、殺人によってもたらされる。

けれども犯人は解らない。

僕には視えない。

だけど——と、外灯が影を落とすアスファルトに足を止めた。

そもそも僕は、榊末さんを助けたいと思っているのか。

解らない事を確かめたい。だけど、それと助ける事はイコールじゃない。

そう気づいて、僕は自分が嫌になった。

身勝手だ。だけど恐い。人が死ぬのは恐い。人が殺されるのは恐い。人を殺す人が恐い。

運命と言うものがあるのなら、僕はそれから逃げたかった。

すっかり陽の落ちた道は暗く、ぽつぽつと立った外灯だけが青白く光る。その作りものの光の中で、底のない穴みたいに真っ黒な自分の形の影を見ていた。

唇を噛む。

そうしないと、涙がこぼれてしまいそうだ。

「なんだあ？ 泣いてんのか」

「わっ……わあ！」

突然背後からこづかれて驚き、その人物を見上げてもう一回驚い

た。

「榊末さん……?」

「ガキは早く帰れよ」

声をかけたのはあっちなのに、それだけ言うときさっさと歩いて行ってしまう。慌ててその背中を追った。

駅の方角から来たと言う事は、今から研究室に行く所だろうか。

「今からお仕事ですか? 夜なのに?」

「時間はあんま関係ねえんだ」

そうなのか。

春とは言え、陽が暮れば風は冷たい。榊末さんは頑丈そうな皮のジャケットを着込んでいた。その事に、ほっとする。

一瞬、自分がどうして安心したのか解らなかった。だが解らない、と思った時には納得していた。死体になった榊末さんは、夏物らしい半袖のシャツを着ていたのだ。

「……目立つか?」

「え?」

どうやら考え事をする間中、僕は榊末さんの顔をずっと見てしまっていたらしい。気づくと、戸惑う様にこちらを見下ろす視線があった。

でも、目立つとは?

つい首を傾げたが、その疑問はすぐに解ける。次の外灯に差しかり、その光が榊末さんの頬を照らしたからだ。

「……目立ちますね。凄いですよ、手の跡」

「思いつ切りやられたからなあ」

自分の頬をさすりながら、情けなさそうに空を仰ぐ。そんな姿を見る内に、ふと歌生さんの言葉を思い出した。

「いつかだました女の人に刺されるって言われてましたけど……。まさかそれも、そう言う……」

「騙してない」

榊末さんは面倒そうに否定したが、僕は別の事を考えていた。

だとしたら、その女の人も容疑者になるだろうか。

フェンスのない研究室の敷地まで来ると、数歩進んで不思議そうに榊末さんが振り返った。

「帰り道だろ？」

「いつも通り抜けてる訳じゃ……」

アスファルトの道路に立ってごによごによと口の中で呟くが、前科があるので信憑性がまるでない。

結局「見逃してやる」と言って笑う榊末さんに手招きされて、道路を外れてコンクリートの敷地に入った。

だけども悪い事はできないもので、少し行くと成半さんが建物から出て来る所だった。

「榊末さん、これは……」

「ばったり会っただけだって。な」

「はいっ、あの、ごめんなさい」

僕は慌てて頭を下げると、相手の反応を見るひまもなく逃げ出した。走りながら、チラリと後ろを振り返る。榊末さんは成半さんに疑わしい眼を向けられながら、それを全く気にしてない。その足元から、ほんの数歩。

血を流し、ぐったりと崩れ落ちた榊末さん。

それと、ちゃんと二本の足で立っている榊末さんの姿を見比べ、不思議と僕は少しだけ笑った。

「またね、榊末さん！」

大きな声でそう言うと、もう振り返らずに家までの道を一気に駆ける。

ちょっと恐い様な暗い道を走りながら、胸の中の深い所で熱い何かがどくどくと拍動するのを強く感じた。

翌日、学校で弓井先生を探して僕は宣言した。

「先生、僕は悔しいです。この世界の中に僕はいるのに、何もできる事がないなんて」

何もせず暗闇でただ泣くだけなら、そんな自分には意味がない。

「だから例えそれが運命だとしても、僕は僕の最善を尽くします」
弓井先生は少しきょとんとして、それからひっそりと笑って頷いた。

そして言葉は、僕の背中をそっと支える。

「では、わたしは君の幸運を祈ります」

可塑世界の監視者（四）

（四）

教室の席に座って、ノートを見ながら首をひねる。それから、腕組みした自分の手が半分もシャツから出ている事に眉をひそめた。

榊末さんと出会って、すでに二週間が過ぎている。五月が終わり、六月になってしまった。これからは半袖の季節だ。

なのに、まだ何もしていない。

これについて一番の問題は、僕が榊末さんの事を何も知らないと言っ点に尽きる。

榊末広和、二十七歳。某民間会社の研究員で、毎日の行動はほぼ職場と家の往復のみ。なぜか女の人に人気があるが、本人が恋愛の機微を理解しないので最終的に関係は必ず破綻する。

——と言うのは、歌生さんに教えてもらった。

こっそり榊末さんの事をたずねるなんて、怪しい事この上ない。理由を訊かれたらどうしようかと思っていたが、歌生さんは「アタシの事は訊いてくれないの？」と少し不満げにただけだった。

この情報によると、榊末さんは女の人から恨まれているのかも知れない。ドラマならこのセンが最も怪しい事になるが、どうだろう。僕の知ってる女の子は彼氏に振られたと大泣きして、それでも数日したらケロリと元気になっていた。女の人って、そんなに弱いとは思えない。

それとも、酷い事をしたのだろうか。榊末さんが？ 殺されるほど？

口も理屈も少し乱暴な所はあるけど、そんなに悪い人なのだろうか。

ノートに書きとめた榊末さんに関するメモへ、眼を落とす。と、知らない内にため息がこぼれた。

殺人が起こるのは夏。これは間違いないと思う。

それが今年か、それとも来年か。もっと先の事なのか、今はまだ解らないけど。

もしも今年の夏なら、時間がない。

何が最善だ。

自己嫌悪で、吐き気さえする。あんな偉そうな事を言ったくせに、指一本も動かせずにいるじゃないか。

どうすればいいのか、何ができるのか。ずっと考えている。それだけだ。きっと考えても無駄だろうと、心のどこかで思っているのに。

だって解らない。想像もできない。

人を殺す理由なんか、僕は知らない。

「栄重^{さかえ}」

「んあ？」

呼ぶと、眠たそうな返事があった。

実際、机にもたれて寝ていたのだろう。座ったまま後ろの席を振り返ると、彼は昼寝を終えた猫みたいに椅子の上で伸びをしていた。僕は問う。

「誰かを殺したいって、どんな気持ち？」

メッシュの入った頭を掻く手が、ぴたりと止まる。

栄重は酷く驚いた顔を一瞬見せて、それから疑うみたいに眉を寄せた。机に突いた肘で支え、上半身を前のめりに傾けて囁く。

「なんでオレに聞く？」

「詳しいかと思って。違うの？」

問い返すと、栄重は少し体を後ろに退いた。机に肘を突いたまま、祈る様に絡めた指を口元に押し当てて。

そして真意を探ろうとでも言うふうには、細めた両目ですぐ傍の僕をじっと見た。

栄重はクラスメートで、席は僕の真後ろ。だが、どんな奴かはよく知らない。

あちらは高等部からの編入組で、おまけに友達を作るつもりがなのだろう。いつも席で眠っているか、どこにもいないかのどちらかだった。

まともに話した事もない奴にこんな事をたずねるなんて、どうかしてる。でも、訊いてみたかった。

中学の時、栄重は人を殺しているから。

そう聞いた。全くの嘘とは思わない。本人も否定しないのがその根拠だ。

だから教えて。

ねえ、死を願うってどう言う事？

「……人を殺すってどんな気分？」

これは僕の質問じゃない。

細めた眼をどこかに逸らして、栄重がボソリとこぼした声だ。

「そう言ったヤツならいたけど、殺す前の気持ちを聞かれたのは初めてだ」

「そう。……ごめん」

「謝る事なんかねーだろ」

「えっ……と、ごめん」

傷ついた様に見えたから。

そうは言えずに、もう一度同じ言葉を繰り返した。

栄重は元々ゆるく結んだネクタイをさらにゆるめ、億劫そうに椅子の背もたれへ体重を預けた。開いたシャツの襟の中で、ペンダントが揺れる。

「誰か、むかつく人間がいてさ」

本人も、声にしてからびっくりしている様に見えた。

僕はもう答えてくれるとは思わなかったし、何でこんな話をするのか解らない。と、栄重の顔にはそんな戸惑いが見えた。

それでも倒れたグラスから水が残らずこぼれる様に、声は続く。

「死んで欲しいとか、消えて欲しいって思った事くらいあるだろう？
殺したいと思うのは、結局その延長線上の事じゃないか。光を見る
事を諦めた様に、どこか翳りのある眼で栄重は言った。

けれども残念ながら、僕にはこの例えさえよくは解らない。

死んで欲しい。消えて欲しい。

そのどちらも願った事がなかったからだ。

「マジかよ」

「うん。まじ」

僕等は互いの顔を奇妙に見つめて、そしてそれぞれ首を傾げた。
変なヤツ。と栄重は呟く。

そうなのだろうか。変なのかな。

同じ制服で、同じ教室。前と後ろの席にいる。なのに僕等は、こ
んなにも違う人間だ。それが不思議で面白く、少し恐い。

だとしたら名前も顔も知らない誰かを、その心を、理解するなん
てできそうもない。まして、殺意を。

それとも僕が、人と違い過ぎるのだろうか。

だって、消えてと願う必要がない。

どんな人間もいつか死ぬと、嫌になるくらい知っているんだ。

どんなに大事でも、どんなに愛しても。いつか朽ち果てて死んで
行く。

僕にはそれが視えてしまう。

同時に、僕とは致命的に合わない人が他の誰かに優しい顔を見せ
るのも知ってる。どんな救い様のない人間にも、幼く純粋な頃があ
ったと言う事も。

きっと誰もが、出会う人の分だけ顔を持つ。全てを知る事は難し
い。酷く、難しい。

だから僕には解らない。

自分の都合だけで死を願う。その自らの身勝手を許す気持ちが解
らない。

結局の所、考え抜いて解ったのはただ一つ。僕がいかに無力かつ

て事だけだ。

その日の帰り道は薄暗かった。雨に濡れたアスファルトの上を、交互に出て来る自分の靴を見ながら隣に問う

「恨まれる覚えてある？ 榊末さん」

また以前の様に、榊末さんの出勤と僕の帰宅時間が重なっていた。何となく並んで歩きながら、つい思いつめて言ってしまったのがこのセリフだ。

榊末さんは半袖のTシャツ一枚で、傘を持つのと逆の手に薄手の上着をかけていた。

その事が、無意識に僕を焦らせる。もう、本当に時間はないのかも知れない。

「覚えはある」

余りに何でもないふうに言うので、僕は一瞬あっけに取られた。傘の下から見上げても、榊末さんに特に変わった様子はない。

ポカンと開いてしまった口を閉じ、一呼吸おいてから確かめる。

「あるの？」

「だから、あるって」

「誰に？」

どれくらい？

殺されるくらい？

「誰にって言われてもな。知らずに恨みを買う事だってあるしな、結構」

「そうだけど……」

「俺、いい顔してるだろ？」

傘を傾け、僕に向けてにやりと笑う。

「おまけに若くて、仕事もできる。やっかむ奴は多いんだ。勝手に寄って来て、勝手に被害者みたいな事言う女もいるしなあ。解らん」
心当たりが多過ぎて、と言う事らしい。

榊末さんの隣を歩きながら、何だかぐったりと肩を落とした。

この人を見ていると、恨まれるって大した事じゃないみたいに錯

覚する。

普通なのか？

冗談じゃない。

もしも誰かが殺したいくらい僕の事を憎んでいたら、もうそれだけで心臓が冷たくなるほど恐ろしいのに。

「刺されるよ、その内」

口を尖らせて忠告すると、榊末さんはおかしそうに吹き出して笑った。

「心配してるのか？」

「してる」

「それで歌生に探り入れたり？」

実に何気ない調子で言われた。

でも僕は、ギクリとした。

思わず弾かれる様に榊末さんの顔を見たが、何の言い訳もできなかった。全く言葉が出ないのだ。

知られていた。一体いつから？

ぱくぱくと口を開けたり閉めたりしていると、小さく笑って榊末さんは傘を持ち替え片手を空けた。そして僕の頭をポンポンと叩く。「俺は構わないけどな。うちは色々研究してて、機密も多い。ほどほどにしとけ」

「……ごめんなさい」

自分の身辺を探られたのに、腹を立ててはいないみたいだ。むしろやり過ぎない様にと注意するため、この話をしたのかも知れない。それがかえって、僕には痛い。

研究所の建物に消える榊末さんを、雨の落ちる傘から見送る。ぶつかる雨がうるさくて、いつもよりどこか冷たい気がした。

足元の黒く濡れたコンクリート。そこに転がる榊末さんの死体を視る。

僕は、本当にこの人を助ける事ができるだろうか。

榊末さんを助けるつもりで、気にかけられたのはこちらのほうだ。

それだけでなく、必死のつもりだった僕の行動は榊末さんには笑って済ませられる程度の事なんだろう。

そんな事で。

「どうやって！」

自分に腹が立った。自分の無力さを罵って、唇を噛む。

足が竦んで動けなかった。悔しさで。恐怖で。

ただ見つめた。そして気づいた。

今、僕を濡らす雨は榊末さんの死体には影響しない。だから血が洗われた訳でもないだろうに、今までそれに気づかなかった。

僕は絶望とでも言うべきもので、死体に刺さるナイフを見下ろした。

可塑世界の監視者（五）

（五）

雨に打たれてはいないのに、最近眼を「開く」事が多いせいか。その夜には熱が出て、翌朝になっても下がらなかった。

母親には学校も休めばいいと言われたが、どうしても確かめずにいられなかった。

校門をくぐったのは教室で午後の授業に入った頃だ。僕は鞆を持ったまま、校舎ではなく礼拝堂へ足を向けた。

厚い扉を押し開けると、みっしりと濃密で重たい空気が頬をなでる。きつとそんな気がするだけだろうが、礼拝堂の空気に触れるといつも自然と背筋が伸びた。

普段通り壁にもたれる事はせず、今日は真っ直ぐ祭壇に向かう。今は僕の他には誰もいない。そのせいか、高い天井に妙に大きく足音が響いた。

ベンチに挟まれた通路を抜けて、最前列に据えられたテーブルの前で足を止める。これは神父さまが全校生徒の前で説教したり、祭礼の儀式で使用するものだ。

胸の中で、心臓がどくどくと騒いでいた。落ち着こうとして、深い息を吸って吐く。それさえ少し震えていた。

まばたきを一つ。

僕の眼は「開かれ」て、今ではないものを視始める。

式服に身を包んだ神父さまが、手順に従って儀式を進める。僕も生徒として、何度も見た事のある光景だ。

だから、覚えがあった。

神父さまの周りには信仰を心得た先生方が控えていて、儀式の進行を手伝っている。その中の一人が、小さなクッションの様なものを両手で差し出す。神父さまはその上に載ったナイフを手に取り、

神に祈る。

神父さまの手にあるナイフは、儀式用のものなのだろう。銀色の刀身には細かく優美な図案が彫られ、持ち手は美しい色の石で飾られている。

僕は胸が苦しい様な、胃が縮む様な恐れで満たされるのを感じた。それは僕が視た、榊末さんの死体に刺さったナイフそのものに見えたからだ。

眼の奥から頭を中心に、じくじくと痛みが走る。それを目蓋の上から手の平で押え、ナイフの行方をもう一方の眼で追った。

それは儀式を終えた後、神父さまが消えるのと同じドアをくぐって行った。ベンチや壁に手を突きながら、後を追う。

このドアの先は神父さまの部屋だったが、今の時間なら校舎の学長室にいるはずだ。それに結局、神父さまの部屋に入る必要はなかった。ナイフは他の祭具と共に、細い通路の一番奥の部屋に納められたからだ。

ここは物置になっていて、儀式の道具などをしまっている。だから、かえって厄介とも言えた。

ナイフを手にした教師の影は、それを室内に置いて再び出て来る。そして鍵を使い、ドアを閉ざした。

普段は使わない、しかし貴重な祭具があるために、この物置はいつも施錠されているのだ。

僕は息を吐き、通路の壁にもたれた。これでは、現在のナイフの所在を確かめられない。

がっかりしながら眼を「閉じ」た。時間の影が見えなくなって、僕一人が残される。鈍い痛みの残る眼で、真正面のドアを見つめた。物置の鍵は教師しか使えない。例え弓井先生に頼んでも、僕が持つ事は許されないだろう。それだけでなく、理由を問われるのは間違いない。

説明できるなら、苦勞はないんだ。

どうにも恨めしくなって、僕はドアの取っ手に手をかけた。開け

ばいいのに。チラリとそんな事を思いはしたが、本当に開くとは思わなかった。

「……あれ」

だから本当にドアが開くと、逆にちよつときよんとした。

どうして鍵がかかってないのか。

当然それを考えるべきだった。が、まず頭を占めたのは別の事。ナイフの所在だ。

物置はそう広くない。六畳ほどの一室だけで、壁際にたくさん棚が並ぶ。だが人を隠すほどの物陰はない。室内に誰もいないひと目で解ると、僕は迷わず中に入った。

眼を「開く」と、急いでナイフが納められるか、取り出される場面を探す。そして視た通りの引き出しを確かめる。と、そこには間違ひなくナイフがあった。

ほつと、肩から力が抜ける。

眼を「閉じ」ても、状態は変わらない。

僕はほんのわずか考えた後、それを手に取って鞆の底に押し込んだ。

「バカ」

「さ……」

栄重だった。

どうしてここにいるのか、いつから見えていたのか。何にも解らないまま、考える間もなく。栄重は僕の腕を掴み、口をふさいだ。急いで物置を出たかと思うと、そのまま隣の神父さまの部屋に飛び込む。

数秒もなかった。

すぐに礼拝堂に続くドアが開かれて、通路に誰かの足音が響く。足音は迷わず物置の前に進んで、立ち止まる様子もなく中に入った。鍵が開いている事を知っていたのだ。

隣のドアが閉じる音を確認すると、栄重は素早く部屋を出て通路を抜ける。気がついた時には礼拝堂の外にいた。

僕は腕を引かれながら、今の事をぼんやりと考える。

栄重が隠してくれなかったら、確実に足音の主に見つかっていた。恐らく教師の誰かだろうが、すぐに戻るつもりで物置の鍵を開けたまま離れたのだろう。そうとも知らず、僕はそのわずかな間に入り込んでしまったのだ。

見つかったらどうなっていたか、今さらながらに血の気が引いた。

「栄重」

僕の手を引いたまま、どんどん先を行く背中と言う。

「栄重、ごめん。ちよっと早い」

息を切らした僕の訴えがようやく届いて、栄重は足を止めて振り返った。すっかり息の上がった僕の様子に栄重はちよっと驚いて、それから気づいた様につないだ手に眼をやった。

「熱い」

「うん、ごめん。でも風邪じゃないから。うつらないよ」

誰もいない校舎裏。面する校舎に窓がなく、敷地を囲む塀が近い。引っ張って来られたのは、その隙間みたいな空間だった。

こんな所には用もないから、来た事がない。だけど栄重はよく来るみたいだ。制服姿の栄重が視える。何人も。それに、弓井先生。息も上がる訳だ。眼がうまく「閉じ」られてないのだと、それで気づいた。

「栄重、止めたほうがいいよ。タバコ」

「あ？」

「吸いガラ、弓井先生がこっそり隠してくれてる」

そう言う場面が視えていた。栄重の捨てた吸いガラを、後で弓井先生が拾っている。

「なんでそんな事……、おい！」

「どうして隠すんだろ、弓井先生……」

うわ言みたいに呟きながら、ずるずるとその場に膝から崩れた。慌てた栄重が僕を呼ぶ。それが段々遠くなり、やがて真っ暗な中に意識が落ちた。

＊

栄重はどうして、礼拝堂にいたんだろう。

目が覚める直前に、そんな疑問がわき起こった。

「テメーがそれを聞くのかよ」

訊きたいのはこっちのほうだと、パイプ椅子の上で腕も足も組んで言う。

保健室だ。白いシートとカーテンに囲まれて、目覚めた時にはここにいた。栄重が運んでくれたらしい。それだけでも意外だったが、僕が起きたのを察し、カーテンを開いたのも栄重だった。

ずっとついててくれたんだろうか。

僕等二人だけらしい。その保健室を一通り見回して、視線を再び栄重に戻した所でたずねる。

「何でいるの？」

「いちゃ悪いかよ」

「悪くないけど。訊きたかったし」

「あ？」

「どうしてあんな所にいたの？」

「テメーがそれを聞くのかよ」

そんな流れで、この一言に到る。

億劫そうな説明によると、栄重が喫煙室代わりになっている校舎裏はけっこう人の行き来が見えるらしい。

いつも通り授業をサボって一服していると、遅れて登校した僕を見かけた。だが僕は校舎ではなく、全然別の方向へ行く。それが気になって、後を追ったのだそうだ。

「なんであんな事した？」

栄重はほんのわずか体を寄せて、囁くみたいにして問うた。秘密めいた声。

「……信じないよ」

栄重の囁きは、僕の耳に酷く甘く流れ込んだ。

一人で悩んで、一人で判断し、一人で行動する事に。自分が疲れ
ていたのだと、それで気づいた。

全て打ち明けて、そしてそれを受け止めてもらえたら、どんなに
いいか。

でも、できない。

僕と彼では、世界の捉え方からして違うのだ。説明した所で、理
解してもらえないとは思えない。まして、信じるとは。

黙り込んだ僕の顔を、しばらく見つめて栄重が言う。

「誰を殺すつもりでいるんだ、硯深」

可塑世界の監視者（六）

（六）

僕は、きょんとんとして栄重を見た。

それから、ああ、と納得する。

そうか、そうなるのか。

先日した相談と、今日の僕の行動が。栄重の中では、そんなふうにつながったのか。

ふっ、と。吐いた息と一緒に、余分な力が抜けるのを感じる。

「それで？ 心配してくれたの」

「そんなんじゃないよ」

眉をひそめて逃がした視線が、ベッド脇のテーブルで止まった。

そこに載っているのは僕の上着と、鞆。

鞆の中には、儀式用のナイフが入ったままになったはずだ。

興味がない訳ではないらしい。栄重の様子に、そう確信した。

だとしたら、僕は言い訳をしなくてはならない。栄重は、ナイフを盗み出す現場を目撃しただけでなく、助けさえしたのだから。

親や教師が求める模範的な解答ではなく、恐らく彼は真実と思えるものでしか納得はしないだろう。

でも……。

「助けてもらっというて悪いけど、話せないんだ」

「オレが信じないからか？」

栄重は僕の言葉を繰り返す。

「……そうだよ」

わずかに眇められた眼が、こちらに向く。気に入らない。と、言われてるみたいだ。

「話せ」

ギッ、と椅子の軋む音がする。腕組みしたまま栄重が踏ん反り返

ったのだ。

「テーマに選択肢なんかねーんだよ。教師の前でこの鞆の中身ぶちまけたっていいんだぜ、オレは」

本当に人の話を聞いてたのかと疑うくらい、偉そうに言った。

僕は妙に納得する。

秘密を握られた僕の立場は、最初から栄重に負けているんだと。

そして何より、僕が栄重を説得するのはどうやら無理そうだと思
った。

＊

僕の眼の事。

僕の眼が視た事。

そのためにナイフを盗んだ事。

全てを栄重に打ち明けた。

――あれほど、恐れていたのに？

僕の中の真実を話して、それを否定されるのが恐かったのに。

しつこく知りたがったのは栄重だし、僕は真実を他に持ってなかつた。脅されたみたいなものだ。話すしかない。

そうやって自分に言い訳しながら、いざ話してしまうと何だかどうでもよくなってしまった。

信じるも信じないも、後は向こうの勝手だ。これが僕に取って唯一の現実なのだから、仕方ない。

それに、と。頭の隅で考える。本当は、ずっと誰かに聞いてもらいたかったのかも知れない。

「僕は、榊末さんが殺されるのを止めたいんだ」

「で、使われるのがそのナイフだって？」

栄重は自分の薄っぺらな鞆で、僕の手にある鞆を叩く。からかう様なその仕草に、慌てて鞆を抱えて距離を取った。

僕の手元にある限り、安心だと思ったのだ。どこかに隠してしま

えば、少なくともこのナイフが凶器になる事はある得ない。

でも、僕は緊張でどうにかなりそう。自分の抱える鞆の中に盗品があるのを知っていて、落ち着ける訳がない。

栄重は鞆をさげた手を肩に担いで、けだるげに頭を傾ける。そうやってこちらを観察している。

何を考えているのか解らない。

けど、僕を否定もしなかった。

だからだろうか。命令口調でついて来いと言われた時に、拒絶する気にならなかったのは。

陽射しに焼かれたアスファルトを歩きながら、僕は問う。

「どこまで行くの？」

「もうすぐだ」

栄重の背中スタスタと先に行く。それを早足に追っていると、一瞬、自分が何をしているのか解らなくなった。

保健室で休んだおかげで体調はかなり回復していたが、結局教室にも行かず早退してしまった。引きずる勢いで栄重に連れ出されたからだ。

理由も目的も聞かされてない。それでもついて行く自分に、少し呆れた。

ずいぶん歩いて、前の足がぴたりと止まる。

周囲を見渡しても、何もない。埃っぽい土の上に、石やゴミがごろごろと転がっているだけだ。ただ、地面からは太いコンクリートの柱が一定間隔で伸びていた。高架下と言う奴か。上には線路が敷かれているらしく、電車の走る割れる様な音がした。

「けど、変な話だよな」

「え？」

栄重は無頓着に鞆を地面に投げ出すと、傍のフェンスにもたれかかる。いつの間にか、手にはタバコ。うつむき加減で火を点けて、煙を吐きながら言葉を続ける。

「そのナイフ、ウチの学校のヤツじゃなきゃ知らないだろ。しかも、

自由に持ち出せるのは教師だけ。それって、犯人が教師の中にいるって事じゃないのか」

「まさか」

反論の声を上げながら、無意識に鞆を掴む手に力が入る。

本当にそれを疑っていないなら、どうして僕はこのナイフを盗んだんだろう。先生にお願ひして、もっと嚴重な保管場所に移してもらえば済む話かも知れなかった。

「でも、うちの学校に知り合いがいるなんて榊末さん一言も……」

「知り合いの必要はねーし、これから知り合う可能性だってあるだろ」

なあ、と。煙と一緒に吐き出す言葉。

眉をひそめた栄重の顔から、僕は視線を逸らせない。

「なア。そのナイフと榊末って人の接点は、今の時点でテメーだけだろ。なア、硯深。どうする？ 自分が関わったせいで、その人が死ぬんだとしたら」

……だとしたら、どちらが先だろう。

殺されると決まったのが先？

それとも、僕が榊末さんを知ったのが先？

僕が、あの人と殺人犯を結び付けると言う事なのか？

光の中を歩いたつもりで、いつの間にか深い穴に落ちていた。全身の血が逆流するみたいで、怒っているのか悲しいのか恐いのかわからない。それとも全部の感情がないまぜに、僕の胸を裂いたのか。

ガクリと、地面の上に膝を突く。両足から力が抜けて、立ってさえいられない。

「僕が……？」

「今のは、ナシ」

——なし？

思わず見上げた顔は、きっとこの上なく情けない表情をしていたのだろう。眼が合うと、栄重は居心地悪そうに顔を背けた。

「悪い。忘れてくれ」

「無理だよ」

「卑怯だった。今のは、……オレの事だ」

捨てたタバコを踏みながら、ボソリと言った。それから、規則正しく並ぶ柱の傍を指す。

「見えるんだろ？ 全部。過去も、未来も」

「……人なら、大体ね」

栄重は少し意外そうに、眉を上げた。

「大体？」

「視えないものもあるよ」

例えば無機物。服やアクセサリーなど、身に着けているものは問題なく視える。だが人の手を離れると、移った体温が冷めて行く様に段々と存在が希薄になる事があった。

そんなふうにいるの間にか見失うか、最初から認知できないものもある。

「探しもの？」

「違う。……いや、そうもな。探してるのは、人間だけど」

「誰を？」

答えない。

そして、そのまま黙ってしまう。

僕は不審を覚えながらも立ち上がり、栄重の指した場所を視た。

そして、自分の表情が歪むのを感じる。

「栄重」

呼ぶと、また倒れるとでも思ったのか、栄重は背後から僕の腕を掴んだ。

「栄重、これは……誰？」

息を飲む気配を、背中を感じた。僕に触れた手が、少し震えている気もする。

これは、誰なのだろう。

僕の眼が視たのは、凄惨な光景だった。

たった一人の少年を、何人もがぐるりと囲んでいる。その時、そ

の場にいた全員、年頃は僕等と変わりないだろう。

そしてめちゃくちゃに蹴られ、殴られて、人垣の中心に倒れた少年はボロボロだった。解らない。どうしてこんな目に遭わなくてはならないのか。倒れた人影は黒髪で、公立高校の制服を正しく着ていた。こんなトラブルとは無縁そうな印象を受ける。

「なにが見える？」

震えてないのが不思議なくらい、か細い声で栄重が問う。

「……一人相手に、何人もがいつぺんに殴ったり、蹴ったりしてる」
僕の腕を掴む力が、痛いくらいに強くなる。

「やられてるほうも最初はやり返してたけど、誰かがバット持って来て……それで駄目になったみたいだ」

「ダメ……？」

「死んだよ」

こんな時、僕は自分に言い聞かす。

これは過去だと。

これはもう終わった事だと。

僕にできる事なんか、ありはしないと。僕に取っては、今、目の前で起こっているのと何も変わりはないのだけでも。

「栄重、これは誰？」

もう一度問う。

倒れ、動かなくなった少年を見下ろして。その頸に、ペンダントが光っていた。

「アニキだよ」

ポツリと。

答えて栄重は、僕の背後から歩み出て膝を突く。知ってか知らずか、彼の兄が倒れた場所に。

現在と過去が重なり視える僕の眼に、俯く栄重はまるで兄の死体を見つめる様だ。

そして今の栄重がそうする様に、中学生の彼もまたこの場所で膝を突く。違っているのは制服と、過去の影はボロボロになるくらい

泣いてる事。

栄重の肩に僕は手をおく。そんな事しかできなかった。すると彼は、吐き出す様に呟いた。

「オレが殺した」

ああ、そう言う事か。

可塑世界の監視者（七）

（七）

でも、それはあり得ない。

僕が視た加害者達の中に、栄重の姿はなかったからだ。思いついた考えを口にする。

「栄重。お兄さん殺した奴、捕まった？」

「いや……」

「僕が視たそいつの顔を教えろって話なら、断るからね」

言っただとたん、栄重は弾かれる様に顔を上げる。凶星らしい。

彼には殺せない。だけど殺したと言う。それは、自分を責めてるって事じゃないか？ 事情は知らない。だけど、お兄さんの死の責任が自分にあると考えている。それは解った。

自分のせいで誰かが死ぬ。その例え話を、栄重は自分の事だと言ったから。

栄重があつさりと僕の話を受け入れた理由が、見えた気がした。ダメモトって事だ。兄の仇でも討つつもりなのか、加害者の手がかりを得るために僕を利用したんだろう。

「意外と馬鹿だね、栄重」

それに、優しい。

涙こそ流さないが、今も兄のためにボロボロに傷ついているのだと思う。

兄の形見を手放せず、いつも頸にぶら下げて。殺してもいないのに殺したと言う。

おまけにロクに話した事もないクラスメートが誰かを殺したがってると誤解して、気にかけるんだ。

「栄重には教えない。けど、僕が目撃者として警察に行くって話なら、乗るよ」

栄重はぽつかりと口を開け、僕を見上げた。これ以上ないくらい、驚いているに違いない。

「そんなの、バレたら……」

「ばれないよ。僕、全部視てるもん」

「二年も前の事件だぞ！」

「ああ、それぞれ。日付と時間だけ教えといて」

過去か未来かの判断はつくが、正確な日時は解らないのだ。そこだけは教えてもらわないと、一気に信憑性がなくなってしまう。

「なんで今まで黙ってたんだって話になるだろ」

「恐かったって言う。二年前なら中学生だし、おかしくないよ。でも高校で栄重と知り合って、黙ってられなくなったって」

それなら矛盾はないと思う。

何か言いたい事はあるのに、言葉が一つも浮かんで来ない。そんな困り果てた顔で、栄重は口をつぐんだ。

僕は笑い、その肩を叩く。

「大丈夫、うまく行くよ」

どれくらい先か解らない。

けど今とは全然違う、穏やかな顔で花をたむける栄重の未来が視えているから。

＊

「あら、お友達？」

そっちの子もかわいいわね。と、紙の束を抱えて歌生さんが機嫌よく笑う。

お友達と言われ、栄重は不本意そうに眉を上げた。

「助手ッス」

助手らしい。

お兄さんの事件について、僕の証言で警察が動いてくれる事になった。

以来、栄重は僕の助手を自認している。

「いいわね。助手を持てる様になったら、一人前よねえ」

「本気にしないで下さい」

まだいるなら、後で冷たいものを持って来てあげる。そう言いながら建物に消える後姿を見送ってから、栄重が口を開く。

「オレは本気だけどな」

「栄重……」

助手と言うのはどうかと思うが、栄重の協力はあり難かった。

正直な所、生まれて初めて自分の秘密を打ち明けた事で、救われた気がしたからだ。情けない事に、僕は一人では駄目なのだと身にしみて知った。

「どこだって？」

「そこ。頭がこっちで、足があっち」

僕が示すと、栄重はその通りに寝転がる。研究室の建物が日陰を作ってはいたが、コンクリートは熱を持って不快にぬるい。暑いとぼやく栄重の額に、あっという間に汗が吹き出た。

「で、血がここまで」

僕は自分にしか視えない血の跡を辿り、それが途切れた位置に立つ。

栄重が寝転がる場所には、死体になった榊末さんが横たわる。その脇腹から流れ出た血がぼたぼた落ちて、僕の所まで続いているのだ。

これは、何を意味するだろう。

栄重のいる所で榊末さんを刺し、犯人がこちらに逃げたのか。

それとも僕のいる場所で榊末さんは刺され、逃げようとして栄重の所で力尽きたのか。

「どうだ？」

「わかんない」

僕はがっかりして、傍の階段に腰かけた。ぱたぱたと服を叩きながら、栄重が隣に座る。

手がかりがないなら、あるものを徹底的に調べよう。そう言う事になって、休日を使って現場に足を運んだのだ。

日曜なら、誰もいないかも知れないし。この期待はあっさりと裏切られ、早々に歌生さんと顔を合わせてしまったが。

それに、新しい発見なんてどこにもない。

「どうすんだ？」

「さあ」

「……増えてる」

うんざりした声に、僕等は慌てて後ろを見上げた。

成半さんだ。階段の上から、眉をひそめてこちらを見ている。

「こんにちは……」

「ここは遊び場ではないんですが」

場所を空けると階段を下り、僕等の前で立ち止まって言った。

「すいません」

「遊んでねーよ」

ほぼ反射的に言い返す自称助手に、僕は目の前が暗くなる。しかも今日は栄重も私服で、いつもに比べて何と言うかチャライ。

恐る恐る窺うと、成半さんの眼が不愉快そうにスツと細められていた。

「すっ……すいません！ これ、友達で……」

「アンタさ、榊末って人と相性悪いだろ」

慌てて遮ろうとする僕をよそに、意外にも成半さんはこの一言に興味を示した。

「君も榊末さんの知り合いですか」

「いや、話聞いただけ」

「へえ……。でも、当たってますよ」

正直、硯深くんが榊末さんに懐く気持ちも解らない。そう言われて、僕は驚いた。

「仲、悪いんですか？」

「良さそうに見えましたか？」

どうだっただろう。考えたが、解らない。

ただ、びっくりした。大人で、一緒に仕事をしているのに。そんな事があるんだ。

「アンタから見て、榊末ってどんな人？」

僕が驚いている間に、栄重が話を進める。成半さんは少し眼を伏せ考えた後、ため息混じりにこう答えた。

「しょうがない人、ですかね」

「どんなだよ……」

成半さんの姿が見えなくなった頃、栄重はぼそりと呟いた。

それよりも僕が引かなかったのは、榊末さんと成半さんの仲が悪いと言う話だ。

「疑わないといけないのかなあ」

「何を？」

「あ、ジュース」

急に声をかけられて、飛び上がるくらい驚いたのは僕だけらしい。紙コップの載ったトレイを持って、歌生さんは階段の上で首を傾げる。栄重はそちらに手を伸ばし、すかさずジュースをねだっていた。

僕もそれを受け取ると、思い切ってたずねてみる。

「成半クンと、榊末クン？ 仲よくはないけど、大人だしね。ケンカする訳じゃないのよ。気が合わないってだけで」

歌生さんはにこりと笑う。

「まだ、榊末クンの心配してるの？」

何がどこまで伝わってるんだろう。

以前は歌生さんに話した事が榊末さんに伝わっていたし、今度はその逆みたいだ。

すっかりしどろもどろになった僕を、栄重は助けず観察していた。

「付き合ってんじゃないの？」

「へ？」

歌生さんはいない。空になった紙コップを受け取って、建物の中

に戻って行った。

その後で、あっさりと解り切った事みたいに栄重が言ったのだ。

「誰と、誰が？」

「榊末って人と、さっきの女」

どうしてそうなるんだろう。

話について行けず、戸惑った。

「話、筒抜けなんだろう？ 男同士のダチなら解るけどさ。男と女で、そんな何でも話したりするか？」

「……そう言うもの？」

「オレはな」

そうなのか。

あの二人が、恋人同士。なさそうだけど、考え出すと逆にあるのかも知れないと思えて来る。

でも、もしもそうなら。女の人にいい加減な榊末さんを、歌生さんは憎むだろうか。

「難しい……」

「それと、もういっこ」

栄重はぴょんと跳ねる様にして、階段のすぐ傍に立つ。それは、さっき僕が立っていた場所だ。

「ここで、血の跡が途切れてるんだよな」

「うん」

「入り口に近い」

階段の上を指す。と言っても、四、五十センチ高いだけだ。研究室の建物は入り口は地面より少し上にあり、そのためドアの前に三段だけの階段があるのだ。

「で、死体があっち」

少し離れた地面を指す。

「この位置関係だとさ、ここで出て来るのを待ってたって考えるのが妥当じゃねえ？」

「待ち伏せ？」

「そ。で、出て来た所をここで刺して、刺された方は逃げようとしてあっちに行く」

「でも、逃げるなら建物に入ったほうがよくない？ 中には誰かいるし、科本さんってお医者さんの資格持った人もいるんだよ」

「ID 認証がいるんだろ？」

さらりと言う。

僕が教えた事なのに、栄重のほうが入ってもない建物の事を解ってるみたいだ。

ここのドアは全部、認証システムがついている。指摘され、その事にやっと気がつく。自分を殺そうとする人間が近くにいるのに、カードを認識させて暗証番号を打ち込む余裕はないだろう。

「だから、犯人はこの建物に入れない人間。じゃなきゃ、待ち伏せする必要ないからな」

ここに入れる人間は疑わなくていいって事だと、言いながら栄重は薄く笑う。

不器用そうなその笑顔に、彼は僕を安心させようとしたのだと思った。

でも、少し気にかかる。

言った後で、栄重は何気なさそうに背中を向けた。だが親指の爪を噛みながら、表情が思案に沈んで曇るのを僕は見てしまった。

悩むみたいなのその様子が、それを隠そうとした事が、気になった。

可塑世界の監視者（八）

（八）

翌、月曜の朝。一時限目の授業の前に、僕と栄重は学長室に呼び出された。

「抗議？」

「いえ、そんな大げさな話では……」

驚く僕に弓井先生は困り顔で言いかけたが、同席した担任は「抗議ですよ」と切って捨てた。

学長室の大きな机に神父さまが着き、その左右に先生方。それと対面する格好で、僕等は机の前に立たされている。

神父さまはおつとりと口を開く。

「とある会社の方から、お電話を頂きました。社の敷地に頻繁に入り込む学生がいて、お困りだそうです。心当たりがありますね？」

あり過ぎて、僕と栄重は思わず顔を見合わせた。それがおかしかったのか、弓井先生は拳にした手を口に当て、笑ってしまったのを隠して言う。

「わたしが電話を受けました。どんな学生かと尋ねられて、困ってしまつて。硯深くんはともかく、栄重くんはね」

「いい子だろ、最近は」

「栄重！」

担任が手にした出席簿で栄重の頭をバシリと叩く。それを「住倉すみくら先生！」と、神父さまと弓井先生が同時にたしなめた。

「君達は伝統ある我が校の生徒であると言う事を、忘れない様に。節度ある行動を心がけて下さい」

神父さまはそれだけ言つて、僕等を意外とあっさり解放してくれた。一緒に学長室を出た担任は、学長たちは甘過ぎると不満げに一人ぶつぶつと言っている。

「つながったなァ……」

これはボソリと、栄重が呟く。

つながってしまった。僕は頷き、廊下から見える校庭に眼を移す。まだ朝だと言うのに太陽はすでに熱く、地面に濃い影を落としている。一応は梅雨だと言われていたが、陽射しだけ見ればすっかり夏に近かった。

学校に抗議の電話を入れたのは、多分成半さんだろうと思う。榊末さんは興味がないだろうし、歌生さんが抗議するとは思えない。しかし誰がしたにしろ、縁ができてしまった。僕を介さず、この学校とのつながりが。

そのきっかけを作ったのが自分だと言う事に、苦いものを覚える。榊末さんを殺害するのは、この学校の誰かである可能性が高い。昨日、僕達はそう言う結論に至っていた。だから余計に。

教室に入り席に着くと、出欠を取る担任の声を聞きながら僕は鞆に手を伸ばした。

机の横に引っかけた鞆には、今もあのナイフが入っている。そのはずだが、ちゃんとあるかどうか確かめずにいられない。

どこかに隠してしまおうかとも考えたが、それは不安でできなかった。隠しても、捨てても、誰の眼にも触れないと言う保証はない。それならいっそ、すぐに確認できる身近にあるほうがまだいいと思う。

僕は鞆の底のタオルに触れ、その内にくるまれた薄く硬いナイフの感触を確認した。小さく安堵の息を吐き、鞆を閉める。

きつと栄重は真後ろの席で、呆れ半分にこれを見ているに違いない。

ナイフの扱いについて、僕等是对立した。川にでも捨ててしまえ、と言うのが彼の意見だ。

そうなのだろうか。そうかも知れない。でも、思い切れない。

——後から思えば、この時点ですでに僕はある種の覚悟をしていなくてはならなかった。

もっと注意深く、もっと慎重になるべきだったのだ。

そうならせめて、予感めいたものくらい感じ取れたかも知れないのに。

「住倉先生と、弓井先生が？」

午後の授業が始まる直前、僕はクラスメートに呆然と問い返した。

「硯深、栄重と一緒に何かやったんだろ？ さっき職員室行ったら、先生達が話してた」

そしてそこで、担任と弓井先生の二人が先方にお詫びに行くと言う話を聞いたと言う。

僕等の事で謝罪に行くなら、先方とは間違いなく榊末さんの所だ。血の気が引いた。

それはこの学校の人間と、榊末さんが接触してしまうと言う事だ。まさか、こんなに早く？

慌てて教室の中を探すが、姿がない。

「硯深？」

「栄重は？ 栄重知らない？」

「さあ……。昼休みの前からいなかっただろ」

お前等、いつの間にか仲良くなったよな。

クラスメートは不思議そうに言ったが、答える余裕なく僕は教室を飛び出した。

教室のドアから廊下へ出る瞬間、鞆の事が頭をかすめた。中に隠したナイフの事が。ここにおいて行くべきか？ もちろん、おいて行くべきだ。

そう思ったが、気がつくと僕は素早く鞆を掴み取って廊下に走り出していた。

早鐘の様な心臓の音が、どくどくと耳の中で鳴っているみたいだった。

昇降口で靴に履き替えながら、携帯電話で栄重の番号を呼び出した。すると意外にも、二回のコールで応答がある。

「どこにいるんだ！」

『……硯深か』

「住倉先生と弓井先生が、榊末さんの所に行くらしいんだ。僕も今から行く」

『ちよつと待て。何で硯深まで行くんだよ』

「栄重……」

僕は足を止め、ぎゅつと強く目蓋を閉じた。可能性を口にするのさえ勇気がいる。

「今日かも知れない」

『行くな、硯深』

「榊末さんが死ぬのは、今日かも知れないんだよ」
行くな、と。

繰り返し止める栄重の言葉を最後まで聞かず、通話を切る。あの様子では、一緒に来て欲しいとは頼めそうになかった。

何度か深い呼吸を試したが、速まった鼓動は落ち着いてくれない。不安と、恐怖と、そして少しだけの高揚と。

それらに胸を満たされながら、僕は太陽の下に駆け出した。

＊

僕が着いた時すでに用件を終え、二人は建物の外で見送られている所だった。

道路から研究所の敷地に入って行くと、やがてその後ろ姿が見えた。

学校を出たのもあちらが先だが、先生達は車を使った。そのため、移動時間にずいぶんの差があったらしい。

「では、どうも。生徒には良く言って聞かせますので」

鞆を持つ手を膝の前で揃える様にし、弓井先生が頭を下げる。と、目の前の榊末さんが吹き出して笑った。

「ちよつと！」

隣の歌生さんが強めに叩く。しかし榊末さんの視線を辿り、自分

も笑いそうな顔になった。

先生達の後ろから近づく僕は、向かい合わせに立っている榊末さんや歌生さんの位置から丸見えだ。笑っても、仕方ないか。僕がここに来たせいで先生達は謝罪してるのに、当の本人がいるんだから。二人の様子に、教師達は背後を確かめようと振り返る。

「硯深！」

だが責めるみたいに呼んだのは担任ではなく、弓井先生でもなく、栄重だった。

駅からここまで走り通し、僕もいい加減びっしょりと汗をかいていたが、栄重はそれよりも酷かった。額の汗が顔を流れ、顎の先からポタポタ落ちる。コンクリートの足元が、小さな丸で次々と染まった。

肩で息をしながら、苦しげに問う。

「なにしてんだ」

「栄重こそ」

オウム返しの質問には、答える気がないらしい。彼は不機嫌そうに眉を寄せ、黙ったまま僕の手を掴んだ。痛いくらいに力が強い。

「帰れ」

「栄重……？」

この時になり、僕はようやく不審を覚えた。

栄重は、この場所から僕を遠ざけようとはしていないか？

「何してる。は、こっちの台詞だ！」

「住倉先生」

急に間近で声がして、僕等は頭をばしりと叩かれた。担任の隣でたしなめる弓井先生も、さすがに困った顔を見せている。

だが、その後ろ。教師二人にくっついて歩み寄る姿に、ギクリと自分の体が強張るのを感じた。

グレーがかった夏物のシャツ。

榊末さんは白衣を着ていなかった。だからその服装は、僕が「視た」榊末さんの死体と酷く似ていた。

「大体、今は授業中のはずだろう！」

「もう帰るって、だから！」

怒鳴る担任に負けず怒鳴って、栄重が僕の腕を引く。よろめきながらその手を頼り、それこそすがる様な気持ちで栄重の顔を見た。

——その瞬間、唐突に解った。

同時に、栄重はいつから気がついていたのだろうと、不思議に思う。

彼はいつでも、僕の伝えた事を僕より正しく理解する。

栄重の眼。

僕を見る眼が、全てを語る。

ああ……、僕だ。

僕が、榊末さんを殺すんだ。

可塑世界の監視者（九）

（九）

どうして栄重は、必死なくらい僕を追う？

どうして栄重は、ここから僕を遠ざけようとする？

どうして栄重は、僕を止めようとしているんだ。

そう考えて、自分でも奇妙なくらいすんなりと受け入れてしまった。

それなら解る。榊末さんを殺すのが、僕だったなら。

僕は、いつも一人だった。

それは、時間の「影」達に触れられないと言うだけの意味じゃない。

僕は、「今」に存在する僕一人しかないのだ。

過去、いたはずの場所も。未来、いるはずの場所にも。僕の「影」は一つもない。

僕と言う存在は幾重にも重なる時間の影達から世界ごと切り離された様に、ただ一人。

それはこの眼が、僕の運命を視る事ができないと言う事を示していた。

いつだったか栄重にそう説明すると、「不便なもんだな」と笑われた。

そして彼は気づいたのだ。

僕の眼に「視」られず、榊末さんを殺せるのは「僕」だけだと。

眩暈がする。体調のせいじゃなく、この気分は自己嫌悪って言うんだと思う。

解らない。僕には榊末さんを殺す理由なんて、一つもないのに。だけど、理由がなくても人は死ぬ。あっけなく、前触れなく。

「大丈夫だ」

何が。

自分がどんなに緊張した顔をしているか、知らないのだろう。僕の腕を掴み、僕を支えながら、極めて何でもない様に栄重は言う。

「今すぐこっから逃げて、二度と近寄んなきゃーんだ」

納得はできなかった。

どんな理屈だよ、それは。

そんなふうに思いながら、一方ではそれが事実だとも考える。

榊末さんを生かしたいなら、榊末さんを殺す前に。僕にできるのはもう、この場から立ち去る事だけに違いない。

唇を噛み、頷いて了解の意を伝えた。すると栄重はほっとした様に息を吐き、こちらに向かって頷き返す。

そして怪訝そうな顔の大人達に向かって、栄重は直角になるくらいに頭を下げた。ただでさえ僕等の会話について来れず、困惑している所にいきなり、だ。

先生達が余計に混乱するのを視界の端で確認しながら、栄重は僕の手を掴み、この隙にとばかりに勢いよく踵を返した。

さすがに、うまい。このまま全力で駆け出してしまうえば、何とかこの場からは逃げ切れる様に思われた。

だが、その勢いは、視界いっぱいのダークブルーに殺される。

「君達」

きっと、僕等のすぐ後ろまで近づいていたのだろう。それを知らずに振り返りざま走り出したせいで、思いつ切りぶつかる事になったのだ。

こっちは全力で衝突したのに、びくともしないダークブルーのスーツを見上げる。隣では、栄重が灰色のスーツに捕まっていた。怪訝なんてもんじゃない。

僕と栄重の肩を掴み、そのスーツの二人は不審そうに眉をひそめた。

「君達は、ここで何をしているんだ」

「……刑事さん？」

一瞬訳が解らずぼうつとした後、ポロリとこぼれた自分の言葉にはっとした。

そうだ。栄重を掴まえた灰色には覚えがないが、目の前に立つダークブルーは知っていた。

栄重のお兄さんが死んだ事件について、証言するために訪ねた警察署で対応してくれた担当の刑事だ。なら、隣の灰色スーツも刑事だと考えるのが当然か。

誰かは解った。でも……。

「どうしてここに？」

こちらがたずねたかった質問を、刑事が先に投げて来た。

栄重が、刑事達を睨みつける。

どうしてだか、僕には栄重が傷ついて見えた。張り裂けそうに強く大きな感情を、持て余している様に。

「そっちこそ。こんな所に何の用だ？」

「君は、弟さんだったね」

慣れているのか、刑事は食ってかかりそうな栄重の態度にも冷静だった。

「アンタ達は、アニキの事件を調べてるはずだ」

「その話は、後にしよう。一緒に来て貰うよ。事情を訊きたい」

「アンタ達は……。アンタ達がここにいるなら……」

それ以上の言葉を制そうと、灰色のスーツが手を上げる。それさえ気づかない様子で、栄重はうわ言みたいに言葉を続けた。

「アンタ達がいるのは、ここに犯人がいるからか？」

バット。

栄重の兄を打ち殺したバットは、発見されなかった。

引きずる音が、聞こえる様だ。

ガリガリと、コンクリートのざらついた表面をバットの頭が引っ搔いて行く。

——いや、引きずられているのは、僕か。

栄重の言葉が、激しい感情が僕を引きずる。この「眼」をこじ開

け、その「影」を視せた。そう言う事、だと思う。

まるで、白昼夢だ。

僕のスニーカーに触れそうな場所を、バッドがガリガリと通り過ぎる。グリップを逆手に握った人影は、もう一方の手に大きなシャベルを持っていた。

研究所の敷地の中で、コンクリートに固められていない場所。ぼうぼうと雑草が生えた辺りに、その人物は穴を掘る。

バッドを投げ入れ、埋め戻した穴。

「硯深くん、顔色が……」

弓井先生が、僕の肩に手をおいた。

濁った水の底から引き上げられる様に、それで僕は我に返る。肩の重みに眼をやり、それから弓井先生に視線を移す。刑事達を一瞥し、榊末さんと歌生さんを通り過ぎて栄重を見た。

どこまで勘がいいのかと。

「栄重、多分それ、外れてない」

少なくともここに、犯人の使った凶器がある。

考えてみると、目の前にいた刑事は驚くほどあっさりと僕の逃亡を許した。

止め様もなかっただろう。それまでの会話から急に離れ、突然ふらりと雑草の中に入ったのだ。不意を衝いた格好になる。

逃げる気ではなかったし、不意を狙ったつもりもなかった。ただひたすら、バッドの行方に意識を取られていただけだ。

膝の辺りまで生い茂った草の中に屈み、手の平で土に触れる。硬い地面に触れてから、二年も前だと思いが当たる。バッドが埋められたのは、きっと栄重の兄が死んでからすぐの事だ。掘り返した土も、もう平らに馴染んでしまっている。

素手で掘るのは無理そうだ。少し考え、鞆に手をやる。中からペンケースを取り出して、地面に中身をばら撒いた。

プラスチックの定規を拾い、土を掻く。途中、「君」とか、「硯深くん」などと声をかけられた気もしたが、夢中になって穴を掘っ

た。

ふと、手元に影が差す。

僕の近くに制服の手が伸び、地面に転がるペンを拾う。眼を上げると、栄重だった。彼は、一緒になって地面を掘る。

何も言っていないのに、栄重には解るらしい。

この下だ。

この下に、探してたものの一端がある。

「止めなさい」

思えば、ひやりとした声だった。

でも僕等はそれに気づかず、懸命に土を引っ掻き続けた。

「止めないか！」

同じ声。

でもさっきと、まるで違う。氷水がこの一瞬で沸騰でもした様な、苛立ちに濁った声だった。その温度差に、驚いて顔を上げる。

と、その頬をいきなり打たれた。

「科本サン！」

悲鳴めいて、歌生さんが叫んだ。

一瞬、自分が殴られたと解らずに、僕は呆然とその人を見上げる。科本さん。初めてここへ来た時に、倒れた僕を診てくれたと言う人だ。

……これが？

診てもらった時に僕は眠っていたし、その後も会う機会がなかった。でも話に聞いたイメージは、もっと柔和な人物だった気がする。年は僕の親と同じか、少し上だろうか。ネクタイのないワイシャツに、白衣を重ねたサンダル履き。ボサボサの頭を苛々と搔く。

目の前にいる人と、そのイメージは結びつかない。

「子供は、大人に従えばいいんだ」

「しかし、いきなり殴るのはやり過ぎでしょう」

行く手を阻む様に立ちはだかつて、刑事の一人が科本さんを責めた。その隙に教師達は僕と栄重を慌てて捕まえ、言い争う二人から

距離を取る。

科本さんは不快そうに眉を寄せ、視線だけで僕を追った。

「随分と榊末君に懐いてると思ったが、私を探るためだったとはね」

「へえ……」

名前を上げられ、榊末さんは意外そうな声をこぼす。

科本さんが二年前の事件に関わっているなら、そう見られても仕方ない。ただ、だとすれば榊末さんに出会ったのと、栄重のお兄さんの事件を知ったのは順序が逆だ。

しかしそんな事は、僕と栄重にしか解らない。証明のしようもないだろう。

榊末さんを利用したみたいない言いに、反論もできず胸がぎゅつと苦しくなる。だから、救われた気がした。榊末さんが、まるで気にした様子もなく科本さんに言った言葉に。

「探られる覚えがあるって聞こえるな、それ」

今さらながら、はっとする。

そうだ。科本さんは、探られている。

「お兄さんの事件に関係あるから、刑事さんがいるんですよね」

「いや、それは……」

「あるはずです」

言葉を濁す刑事に向かって、僕は言う。

「だって、埋めた。栄重のお兄さんを殺したバットを、科本さんはここに埋めたんだ」

先生達が、驚いた様に僕を見下ろす。刑事達は瞬時に視線を交わし、その眼をさっと科本さんに走らせた。

科本さんは忌々しそうに僕を見て口を歪める。引き攣れたみたいな笑い方だ。

「あっ！」

誰が上げた声か解らない。

とにかくその瞬間に居合わせた全員が、一体何が起こったのかすぐには理解できなかった。

科本さんは膝をわずかに曲げて屈み、すぐ傍の刑事に肩を入れて体当たりした。灰色のスーツがよろめくと、横を素早くすり抜けてこちらに近づく。

当然、もう一人の刑事が間に入る。だが、距離が余りない。ダークブルーを着た刑事は、元から僕等の傍にいたからだ。

押しとどめるスーツの脇から、白衣の腕が僕の胸ぐらを掴む。

「何故だ？ 何故お前らは、私の邪魔ばかりするんだ？ 仕事も人生も、滅茶苦茶だ！」

「落ち着けよ、科本さん」

制服の襟に触れた腕を、さらに榊末さんが掴んで止める。

「子供のくせに。黙って従え！」

誰の事を言っているのか、僕には解らなくなっていた。僕の事だけでなく、他の誰かを一緒に責めている気がしたから。

「硯深くん、とにかく離れて！」

言って、胸を押す。その弓井先生と担任と、

榊末さんと刑事の一人。四人がかりで引きはがされて、僕は栄重に引きずられる様に輪から外れた。

不安げな表情の歌生さんと一緒になって、建物の壁に背中をこすりつける。心臓の音と呼吸が、せわしく速まった。

「大丈夫か？」

「……うん。ごめん、栄重。説明——」

説明しないと。

僕が今、何を視たか。何を知ったか。

栄重の横顔を見ながら、そう思う。横顔だ。彼の眼は、ずっと科本さんから離れない。

次の瞬間、その表情がさっと青ざめた。

「なんで……！」

こぼれる様に、呟かれた言葉。意味は、すぐに解った。

視線を追う。

少し離れた辺りで、争っている大人達。科本さんが抵抗している

せいだ。もう一人の刑事が駆けつけ、教師達に離れる様にと身振りで指示する。

離れようとする弓井先生の、鞆が揉み合う腕にぶつかる。手を離れ、落ちた地面に鞆の中身が広がった。

息を飲む。どうしてそれが、弓井先生の鞆から転がり出るのか理解できない。

科本さんの姿が、さっと消えた様に見えた。
屈んだのだ。

そうして、素早く拾い上げた。
銀色に輝く、あのナイフを。

（十）

刀身を細かな図案で優美に飾り、持ち手を彩る美しい石。儀式用の飾りナイフ。

それは弓井先生の、ではなく、僕の鞆に入っているはずのものだった。

僕は壁から離れ、土の上に放り出したままの学生鞆に飛びついた。一番底に押し込んだタオルの包みを慌てて引き出す。

指先に触れたタオルの一端を握って引っ張った。と言う事だと混乱し、手がうまく動かない。すると手の中からくるくると、タオルがほどけながら地面に落ちる。

カラリ、と。中に包まれた薄く硬いものが、タオルから地面に転がり出た。

土の上の石に当たって軽い音を立てたのは、ナイフではなくスチールの定規。

「何で……」

「硯深！」

鋭い声。切迫したそれに、弾かれる様に顔を上げた。

すぐそこに、きらめくナイフの刃先がある。

解らない。

誰かに死んでと望む気持ちが。

でも一つだけ、知った事。僕を見る科本さんの眼の中に、光はない。

気持ちがどうこうって問題じゃない。もうとつくに、僕とは違う生き物みたいだ。

ザク——と引き裂く音がして、血が滴る。

僕の血が？

いや、違う。僕じゃない。傷ついたのは、ナイフが切り裂くよりほんの少し前、僕を突き飛ばしたダークブルーの腕だった。肘の辺りをざっくり切られて、ボタボタと赤黒い染みを草と土の上に落とす。

「硯深！」

もう一度呼ばれる。素早く体勢を立て直し、刑事は僕を抱える様にして刃物から離れた。その腕の中から、声の方を見る。と、こちらに駆け寄ろうとするのを、担任に抑えられた栄重がいた。

その傍で、弓井先生が蒼白な顔で呆然としている。口元を押えた手が、少し震えている様に見えた。

——侮っていたのだ。

僕等には理由が見えなかった。そうまでする、必然性が。だからまさか、と侮った。

理由なんか、どうだってよかったのに。

「科本さん。あんた自分が何をしてるか、解ってないのか？」

その声に、ぎくりとする。

どうして？

……ああ、榊末さんの声だからだ。

「いいや、解ってるよ。ずっとこうしかった。私の邪魔をするから、悪い。そんな人間は要らないだろう？」

「どうかしてる」

「解ってないのは君だよ、榊末君」

「榊末さん！ に……」

逃げて。——と、最後まででは言えなかった。

声になる前に、榊末さんが刺されたからだ。

まるで道ですれ違うみたいに何気なく、科本さんはスタスタと近づいた。ナイフを振り上げるでもなく、荒げた声を出すでもなく。ただそのまま、ナイフの刃を榊末さんの腹に刺し入れる。

「ずっと君が疎ましかった。若くて、尊大で、自分には何でも許されると思ってる。実際、優秀だったからね。余計に、憎かったよ」

目についたから、ついでに刺したと。僕には聞こえた。

コンクリートの上に、倒れた体。靴に触れそうなそれに少しだけ眼を留めて、ずっと上げた視線が僕の眼と合う。

次は自分だと気づく前に、科本さんは榊末さんの隣に引き倒された。

灰色のスーツが腕を捻り上げ、白衣の背中を膝で踏む。守る様に僕を抱えた手が離れ、もう一人の刑事がボタボタと血を落としながら傍に寄った。二人がかりで押さえつけ、手錠をかける。

榊末さんには、歌生さんが駆け寄った。重ねた両手で胸を押し、蘇生を試みているらしい。

後ろのそれを気にしながら、栄重がこちらに近寄って来る。足を止め、振り返る様に僕を見る眼が暗かった。

チリチリと、何かの焦げつく音がする。そして尖った錐で眼球を貫かれてもした様に、頭の奥まで届きそうな鋭い痛み。

「血が……」

手の平で目蓋を強く押さえながら、壁にもたれてずるずると座り込む。顔にやった手の肘が、階段に当たる。

「これ、榊末さんの血の跡じゃなかった……」

建物に続く、階段のすぐ傍。

つい、昨日の事だ。ここで、歌生さんがくれたジュースをのんきに飲んだ。

血の跡が、点々と。僕の足元から榊末さんの死体まで続く。榊末さんの血ではない。返り血が、犯人から滴った訳でもなかった。ダークブルーのスーツを着た、刑事が落とした血だったのだ。

今ならそう解るのに。

チリチリと焦げつくみたいな音がするたび、頭の中に新しい場面が刻み込まれる。まるで最初から、僕が視たのはこの光景だったかの様に。

吐き気がする。眼の奥が痛い。きつい陽射しのせいだけでなく、頭が内側から熱を持っているみたいだ。

グレーがかった夏物のシャツが、脇腹の辺りから黒く血に濡れて行く。シャツの色が変色した真ん中に、ナイフが残ったままだった。その胸から手を離し、首を横に振る歌生さんをぼんやりと見た。

＊

「オレのせいだ」

僕が目を覚ますなり、ベッドを覗き込んで栄重は言った。

あのまま、意識をなくしてしまっただけらしい。

いつの間にかエアコンの効いた病室に寝かされ、栄重や担任に見つめられていた。

担任が、静かにドアから出て行く。目覚めた事を、誰かに知らせに行ったのだろう。

それで僕は、栄重に訊いた。

「あのナイフ、どうして？」

僕の鞆にあるはずのナイフ。それがどうして、弓井先生の鞆にあったか。栄重にたずねるべきだと思った。僕他に、ナイフの所在を知っていたのは栄重だけだったから。

「オレが取った。硯深の鞆から取って、隠したんだ」

「僕が、榊末さんを殺すと思ったからだね」

「……そう思った」

疑った事を恥じる様に、栄重は顔を伏せる。

僕に視えないのは、僕だけだから。

そう気づいて、先に止めようとしてくれた。恥じる事なんてない。それを知らず、身勝手に動いた僕自身が恥じるべきだ。

栄重は、あの喫煙室代わりに行っている校舎裏にナイフを隠した。

僕を疑い、行動する決心をしたのが今日の事だったからだ。

学長室に呼ばれた後で、僕の隙を狙ってナイフと定規をすり替えた。しかし自分で持っておく気にもならず、とりあえず校内では最も安全であろう場所に隠したのだ。後で別の場所に移すつもりで。

だがそこは、弓井先生に馴染みのある場所でもあった。栄重の改心を信じ、彼の吸いガラを始末していたのは弓井先生だ。

そして先生は、見つけてしまったのだろう。

「栄重……解らないんだ」

ぼつりと、知らずの内に言葉がこぼれた。

問う様な彼の眼が、こちらに向く。

「視えなかった。確かに、誰が榊末さんを殺すのか、視えなかったんだよ。なのに、解らないんだ。今になって思い出そうとしても、最初からこうなるって視えてた気がする」

どっちが最初？

どっちが正しい？

ノートに綴った文章を、消しゴムで消して書き直したみたいだ。元の文章は失われ、僕には書き直された文字しか解らない。

「硯深？」

ベッド脇の椅子から立って、栄重は僕を心配そうな顔で見た。泣いてしまっていたせいだ。止めたいのに、止まらない。涙が、ぼろぼろこぼれて枕に染み込む。

「助けたかったのに。榊末さんを……死なせたくなかったのに！」

「硯深のせいじゃない」

苦しそうな顔で、栄重は言った。

解ってる。

僕のせいだよ、栄重。

ちゃんと、解ってる。

ドアが開く。担任と一緒に、ワイシャツをめくり上げ腕に包帯を巻いた刑事が現れた。僕の涙に驚いた様子で一瞬立ち止まったが、何も言わずに病室に入った。

栄重と担任を廊下に出して、僕に問う。

「どうして、君があそこに？」

僕にはもう、答えられなかった。

刑事は幾つもの質問をしたが、僕は口を開けなかった。いつまで

もそんな調子だったので、詳しい話は後から聞いた。

ナイフを持っていた弓井先生は、警察から特に厳しく事情を訊かれたらしい。

本人の説明によると、校舎裏で偶然ナイフを見つけ、急いで出かける所だったのでついそれを鞆に入れたまま外出してしまったそうだ。これはナイフを隠した栄重の証言があったので、信じてもらえた。

次に問題なのは、なぜ栄重が儀式用のナイフを隠したりしたのかだが、これは単にいたずらで片づけられた。栄重本人がそう主張して、警察と学校が納得したからだ。

そして僕は栄重に巻き込まれただけだと、いつの間にかそんな話になっていた。

実際、巻き込んだのは僕のほうだ。

だが栄重を中心としたほうが、話としては解りやすかったのだろう。

結論から言うと、科本さんには十九歳の息子がいて、これが二年前に栄重のお兄さんを殺した連中の主犯格だった。だが当時十七の少年にしては犯行の隠蔽が巧妙で、犯行当時の息子のアリバイを主張していた父親を警察は監視していたのだ。

あの時の僕等はそんな事情を知らなかったが、あちらにすれば僕を疑うのも無理はなかった。息子の犯行を目撃したと証言した僕が、被害者の弟と一緒に自分の周辺をうろついているのだ。

復讐されるとでも、思っただろうか。

僕はただ、止めたかった。榊末さんの死を。その運命を。

ただそれだけ、だったのに。

けれども今となっては、もう解らない。

眼を閉じて、記憶を探る。

殺人者の姿が視えず、死体だけが横たわる光景。

それを探しているのに、僕の頭の中にはもうその記憶はどこにもない。

榊末さんがいて、ナイフを持った科本さんがいる。その二人が近づいて、接触し、榊末さんは血を流して倒れるのだ。

最初から、そう決まっていた様に。

あの時、僕の頭をチリチリと焼いた。あれは、何だったのだろう。フィルターをかけられた様に、僕の眼に見えなかったもの。それが後から頭の中に書き込まれたみたいだった。

僕には、僕の運命が見えない。

だとしたら。

最善を選ぶつもりで、この運命は僕が作った。

(可塑世界の監視者／了)

Copyright (C) 2010 mikumo / 1979.
All rights reserved.

可塑世界の監視者（十） ※本編最終話（後書き）

可塑世界の監視者、本編はこれにて終了です。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

ご指摘、ご意見などございましたらお聞かせ頂ければ幸いです。

可塑世界の住人（二） ※番外編後日談

（一）

魂には匂いがある。

いや、本当は匂いではないと思う。

けれどもとにかく目に見えず、手で触れない何かがある。

だから長く使った物には持ち主の魂が宿り、いなくなった後もその人を感じさせる。

そう言う事がある。

最初は信じてなかったが、ずっと後になってオレは知った。

人は、絶えず魂の影を残しながら生きているのだ。

「オレのせいだ」

事実、そうだった。

でもベッドの上からオレを見る硯深は、それを信じていないみたいだった。

硯深が正しかった。

あのナイフを隠したりせず、持っているべきだったのだ。そうすれば弓井はナイフを

見付けなかったし、あの場所に運ばれる事もなかった。もしかしたら、あの人が死ぬ事

も。

榊末を殺すのが、硯深だと誤解した。オレが招いた結果だった。

硯深は、助けてくれたのに。

オレがした事は……。

「栄重くん」

不意に声を掛けられて、ぎくりと震える。火の付いたタバコが指

から滑り、地面に落

ちてトンと跳ねた。

「未成年の煙草は違法ですよ」

「デメーかよ……」

全身黒ずくめの男を見上げる。校舎の作った日影に入り、弱々しくほほ笑むのは教師

の弓井だ。

人の来ない校舎裏。ここは、オレがタバコを吸ういつもの場所だった。それを知って

いるのが、弓井だ。

マジメで優しげな顔をしているが、本当はどうか解らない。随分長い間オレの喫煙を

見逃した上、ご丁寧にこっそりと吸殻の始末までしていたのだ。教師として、どうなん

だそれは。

だがさすがに、目の前で吸わせるつもりはないらしい。弓井は足元に落ちたタバコを

踏んで消し、勝手に探ったオレの制服から箱ごと見付けて没収した。それから少しの間、黙ったままそこに立っていた。視界の端で、黒い革靴がいつまで

も動かない。顔を上げると、こちらを見下ろす目と合った。

「硯深くんの、様子はどうですか？」

お見舞いに行っていると聞いたので。

そう続けた弓井を、オレは無意識に睨み付けた。なんだよ、それは。自分で行ってな

いって、そう言う事かよ。

「何でテメーは行かねェんだよ」

「わたしは……」

また黙る。迷う様に、目を伏せて。

その様子に、イライラする。気になるなら、自分で行って確かめればいい。どうして

そうしないんだ。硯深は、待ってるだろうと思うのに。

この学校で、硯深が一番信頼しているのは弓井だと言っていた。そんなヤツが、どうして生徒の見舞いにも行かないのだろう。

「わたしには、そんな資格ありませんよ」

「は？ 資格？」

意味が解らず、投げやりに言った。
後悔する。

「わたしの顔は、見たくないでしょう。硯深くんは……。亡くなった方と、親しかった

そうですから」

この言葉で、やっと知った。

あの場所に凶器を運んでしまった事を、この人は悔いている。憎まれても仕方ない、

当然だとさえ、考えているのかも知れなかった。

じゃあ、オレは？

責任を感じてる。オレが余計な事をしなければ、もっと違った結果になったかも知れ

ないと。

でもだからと言って、憎まれるのも当然とは思えない。そこまで
は、思えない。

急に、自分の体が小さくなってしまったみたいだ。心細く、恐い。
それに、罪悪感。

「……元気だよ」

伏せられた目が、ぱっと開いてオレを見た。その光は、すぐに曇
ってしまったが。

「元気だ。体はね」

「体、は？ それはどう言う……」

戸惑う様に、弓井が小さな声で問い返す。

どう言う意味か？

そんなのは、こっちが知りたい。

＊

病室のドアを、ノックなしで開けた。

中の人物は驚いた様に、さっとこちらに顔を向ける。

歌生と言う女だった。

「あら。熱心な助手サンね」

「また来てんのか。仕事しろよ」

「してるわよー。今はね、脩クンを口説くのが仕事だもの」

「テメーが言うに変な意味に聞こえんだよ」

「栄重」

ベッドの上で半身を起こし、硯深はオレに向かってそっと笑う。

「毎日来なくてもいいのに」

「来るぜ。この女が来てる内は」

「もう。どうして邪魔するの？」

心配しなくても、切り刻んだりはしないわよ。と、歌生は物騒な
事を言っ唇を尖ら

せる。

最初に考えていたよりも、この歌生と言う女はずっと厄介な人間だった。

元はと言えば、硯深が警察に全部話した事が原因だが。アイツに取っては、正直に。

過去や未来を「視て」しまっ、自分の目の事を。その目で視た殺人事件を止めようと

、榊末達に関わった事を全て話してしまったのだ。

当然、警察は公式にそれを信じなかった。ただ胡散臭そうに距離を置き、硯深の言動

を注意深く観察するにとどまった。まア、常識から考えて、妥当な判断と言えるだろう

。

ただ、歌生はそうしなかった。

どこで漏れ聞いたのかは知らないが、硯深の能力の事を知ると即座に協力要請を申し

入れた。実験の、だ。

科学者などと言う人種は、チョーノーリヨクには懐疑的でも変わった脳なら見てみた

い。

そう言うモノ、だそうだ。

とにかくそれで、硯深が入院してからこの一ヶ月、ほとんど毎日歌生はこの病室を訪

れている。口説くと言うのは、研究対象として、と言う意味だ。

それがどうにも面白くない。どう考えても、実験動物扱いじゃないか。だからオレは

そのジャマをするためもあって、せっせと病院に通っていると言う訳だ。

それにしても、硯深を口説くのが仕事だとは知らなかった。てつきり個人的趣味だと

思っていたのに。こんな研究を許すなんて、あの研究所も得体が知れない。

「また来るから、考えて置いてね」

そう言い残して帰る背中を、思い切り舌を出して見送ってやる。

「栄重」

たしなめるみたいな声は、しかしどこか笑いを含む。

個室だ。病室の中で二人になって、オレも硯深もほっと肩の力を抜いた。どうも自分

達以外の人間がいると、無意識に気を張っているらしい。

「まだ断ってないのかよ」

「……うん。迷ってる」

研究に協力するつもりがあるのかと、驚いた。それが顔に出ていたらしく、硯深は困

った様な苦笑を浮かべた。

「一度、ちゃんと調べてみたいとは思うんだ。自分の頭が、どんなふうになってるか」

でもそれは、恐いだろう。

自分の中にある、自分でさえ見た事もない部分を白日に晒すのは。だが同時に、知らないと言う事だって恐いのだ。不可解な物を、

身の内に飼う事だっ

て。

迷う気持ちを、否定する事もできなかった。

「検査するにしても、アイツんところはやめとけよ。胡散臭エ」

「うん……考えとく……」

どうもオレは考え事に気を取られると、知らずの内にうつむいて
いるらしい。歯切れ

の悪い返答に顔を上げると、そこには眠そうに目をこする硯深の姿
があった。

「硯深？ 解ってるか？」

「大丈夫……」

——では、なさそうだ。

こうなってしまうと、後でこの時の会話を覚えている事はほとん
どない。そのままス

ウと静かな息を吐き、硯深は眠りの中に入って行った。

その寝顔に向けて「おやすみ」と小さく言うと、オレは親指のツ
メを噛んでうつむく

。

事件以降、硯深はよく眠る様になった。

あれからひと月が経っている。

ケガをした訳でもないと言うのに、硯深がまだ退院を許されな
いのは精神面に不安

が残ると判断されているためだ。

現実から目を背けているのだろう。心を守るために、眠りを必要
とする場合がある。

医者は、そんなふうに説明した。

目の前で人が死んだのだ。トラウマになっても不思議はない。だが、それだけだろう

か。硯深が見たくないのは、現実の、この状況だけだろうか。

オレなら、両目を抉り出してしまいたい。

変える事もできず、ただ受け入れるしかない未来なんか。

知った所で、苦しむだけだろう？

可塑世界の住人(二) ※最終話

(二)

ある日の放課後、オレを見るなり硯深は叫んだ。

「黒い！」

髪の話だ。

椅子を引き寄せながら、病室に自分達二人だけなのに内心でほっとした。

歌生がいたら、どんなふうにからかわれるか解らない。

「どうしたの？」

「別に」

本当は、我慢できなくなったのだ。

チャラチャラと派手な頭があんまりにもバカな気がして、思い切り黒く染めてやった

。多分、何もしてない硯深の髪より黒いと思う。

昨夜、急に嫌になった。

風呂に入って、びしょ濡れの自分を鏡で見た時。そんな場合かよ、と腹が立った。

情けねエ。

格好ばかりイキがたって、オレは何者にもなれないのに。

「前も思ったけど、髪が黒いと似てるねえ」

「あ？」

「似てるよ、栄重。やっぱりお兄さん」
なんの話だ。

自慢にはならないが、オレとアニキは似てない兄弟で有名だったのだ。

優等生の兄と、問題児の弟。

公立では一番頭のいい高校に進んだアニキ。一方、中学でもうすでに他校の学生と暴

力沙汰を起こしていたオレ。

そんな性格や頭の中身もそうだったが、姿形も全く違った。アニキは痩せぎすでひょ

ろ長かったし、オレは体力だけが取り柄のチビ。

そりゃ、二年も経てば身長も伸びた。だが今さら、死んだ人間と背比べする機会もな

い。

それより。

「前も思ってたって、なんだよ？」

「あ、ごめん。ちょっと……」

「眠てエふりすんじゃないえ！」

しまった、と言う顔でベッドの中に潜り込む硯深をムリやり起こす。

問い詰めて、一瞬こちらがヒヤリとした。

硯深の目が「視た」事については、なるべく触れない様にして来た。でもこれは、ま

さにそう言う話だったからだ。

しかし聞いている内に、これは重要な事ではないかと思いはじめた。無意識に、親指の

ツメを噛む。

「最初に、二人で現場行っただろ？ お兄さんの事でさ。その時、あの高架下で視たん

だよ」

髪の色と雰囲気の違いで、一瞬オレとは解らなかったと硯深は笑う。

そしてアニキに似たオレが、アニキのために花を手向ける。そんな場面を「視た」の

だと言った。

「過去や未来を勝手に視られて、喜ぶ人いないから……黙ってた。ごめん」

「悪い、帰る」

「ごめん」

「あ？ あア、違う違う。用事思い出した」

硯深は心配する様な顔でこちらを見た。どうやら気分を害したと思っただけらしいが、そ

うではない。

そうではなかったがオレは考える事に気を取られ、ロクに氣遣う余裕もなく病室を後にした。

今のオレが、今回の事件が起こる以前の、まだなにも知らない硯深の目に触れられる

なら？

もう止めると、伝えられたら？

病院を飛び出して、例の高架下に急ぎ足で向かう。もう時刻は夕方だったが、比較的

まだ日は高い。なんとか明るい内に、辿り着く事はできるだろう。

あの時点で硯深が視たのが、今のオレなら？

オレ達があがいたために、榊末が死んだなら。

あの時点でオレ達が手を引けば、違った結果を作れはしないか。

途中、目に付いた花屋で小さな花束を作ってもらった。

それを片手に、アニキの死んだ場所に立つ。

正直言えば、こんな日が来るとは思ってもいなかった。アニキのために、花なんて。

オレが死ぬべきだったのだ。

二年前、本当はオレが死ぬはずだった。

アニキは、オレと間違って襲われた。その事だけは明白だった。

アニキは優等生で、通っているのは頭のいいヤツばかりの学校。

リンチされたあげく

殺される様な、そんな人生とはまるっきり無縁って人種だった。

一方オレは中学にもほとんど行かず、目が合ったってだけで道端で殴り合いのケンカ

をする様なバカなガキ。

恨まれる覚えなら、いくらでもあった。

なにもかもがムカついて、できのいいアニキなんて特に気に食わなかった。家の中で

も外でも、晴れない胸のもやもやをかきむしる様に暴れていた。

だから、どうすればいいのか解らなかった。

今も、解らない。

だって親も、周りも、オレじゃなくアニキに生きてて欲しかったはずだ。

自分でさえそう思うのに、アニキはオレのせいで死んだのだ。

窒息しそうな重い罪の意識の中で、指一本も動かさなかった。

足の下で、ジャリ、と硬い土が音を立てた。二年前、アニキの血を吸った土。

オレは自分の胸に手をやって、首に掛けたペンダントを握る。アニキの形見だ。

あの勉強一筋、洒落っ気なんかカケラもないアニキがアクセサリ。遺品の中にこれ

を見付けて驚いたが、なんの事はない。鎖に通った金色のプレートは小さくて解り難い

が、なにかの文字が刻まれている。どうも、神社かどこかのお守りらしいのだ。きっと

勉強の神様に違いない。

オレはそのプレートをギュッと握り、深呼吸して気を落ち着かせる。

それから、記憶を頼りにあの日の硯深の位置を探した。

硯深、もういい。

もういいんだと、オレは過去の硯深に語り掛けた。

＊

次の日起きたら状況は全部違っていて、榊末は生きているし、硯深だって入院してな

い。

なにもなかった事になった。

実は少しだけ、そんなふうに劇的な変化を期待していた。

オレが、アニキの死んだ現場に硯深を連れて行った時。あの時点で手を引けば、少な

くともあんな形で榊末が命を落とす事はなかっただろう。

でも榊末は死に、硯深は今も入院している。
オレのメッセージが過去の硯深に届かなかったか、それともでき
てしまった過去を変

える事は不可能なのか。解らない。

ただひとつ確かなのは、あの時オレ達は引き返そうとしなかった
と言う事だ。

「昨日、悪かった。急に帰って」

「いいよ。用事でしょ？」

硯深は本当に気にしている様子なく、ただ不思議そうに首を傾げ
た。

「まだ、言っていなかったよな」

「何？」

「アニキの事件、ちゃんと犯人捕まりそうだ」

「……そう、よかった。役に立てて」

「それからさ、やっぱ似てるみたいだ」

「え？」

「アニキに、オレが」

昨日は暗くなるまでをあの高架下で過ごし、夜になってから家に
帰った。家中が暗く

、誰もいないと思っていたらリビングのテレビだけが点いている。

テレビの前にあるソ

ファを見ると、親父が寝ていた。

オレの気配でも感じたのだろうか。テレビを消した瞬間に親父が
起きて、はっと息を

飲んだ。

十秒ほどもそのまま、ようやくオレと気付いてほっと肩の力を

抜く。

なにも言わなかったが、よく解った。オレをアニキと見間違えたのだ。

それで、前夜の事を思い出す。

風呂に入っている最中に自分へ嫌気が差したオレは、Tシャツとジーンズを手早く身

に着け、濡れた髪のままコンビニに行こうと靴に足を突っ込んだ。

そこを親父に見付かり、夜遅かった事と格好のだらしなさで小言をもらった。ほとん

ど押し問答になったのだが、オレがコンビニに行こうとしたのは黒い髪染めを買おうと

したからだ。それを知ると、親父は自分の白髪染めを持ち出して来た。

渋々折れる格好でそれを受け取り、風呂に戻って髪を染めた。

風呂から上がると、親父は眉をひそめてオレを見詰めた。

派手な茶髪とメッシュをやめて、黒い髪になったのだ。眉をひそめる理由がない。

……でも、親父にはあった。それをようやく理解できた。

オレが、アニキと似ていたからだ。

不思議と、嫌な気持ちにはならなかった。

家族を失って、苦しんでいたのは自分だけじゃない。親父の顔を見て、その事にやっ

と気が付いた。

魂には匂いがある。

それに触れると、苦しいほどに切ないなにか。

親父に取って、アニキの匂いを感じさせる存在はオレなのかも知

れなかった。

「栄重？」

硯深は、不意に黙り込んでしまったオレの顔を心配そうに覗き込んだ。

「硯深はさ……」

シヤラリ、と。指先で触れたペンダントが、かすかな音を立てて揺れる。

「硯深はその目の事、疎ましいって思ってるかも知れないけど」

「……うん」

「オレは、救われた。その目と、硯深に」

ベッドの上から伸びた手が、丸めたオレの背中に触る。その掌の熱が広がって、じわ

じわ溶かして行くみたいだった。

うつむけた顔から白い床に、透明の雫がぱたぱたと落ちる。

「オレを救ったのは、硯深だよ」

それ以外の言葉がない。

硯深は一言も口を開かず、見守る様に、慰める様に。情けないくらいに泣いたオレを

、暖かな掌で溶かし続けた。

(可塑世界の住人／了)

Copyright (C) 2010 mikumo / 1979.

All rights reserved.

可塑世界の住人（二） ※最終話（後書き）

ここまで眼を通して頂き、ありがとうございました。
少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

ご意見などございましたら、ぜひお聞かせ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2854m/>

可塑世界の監視者

2010年10月8日11時58分発行